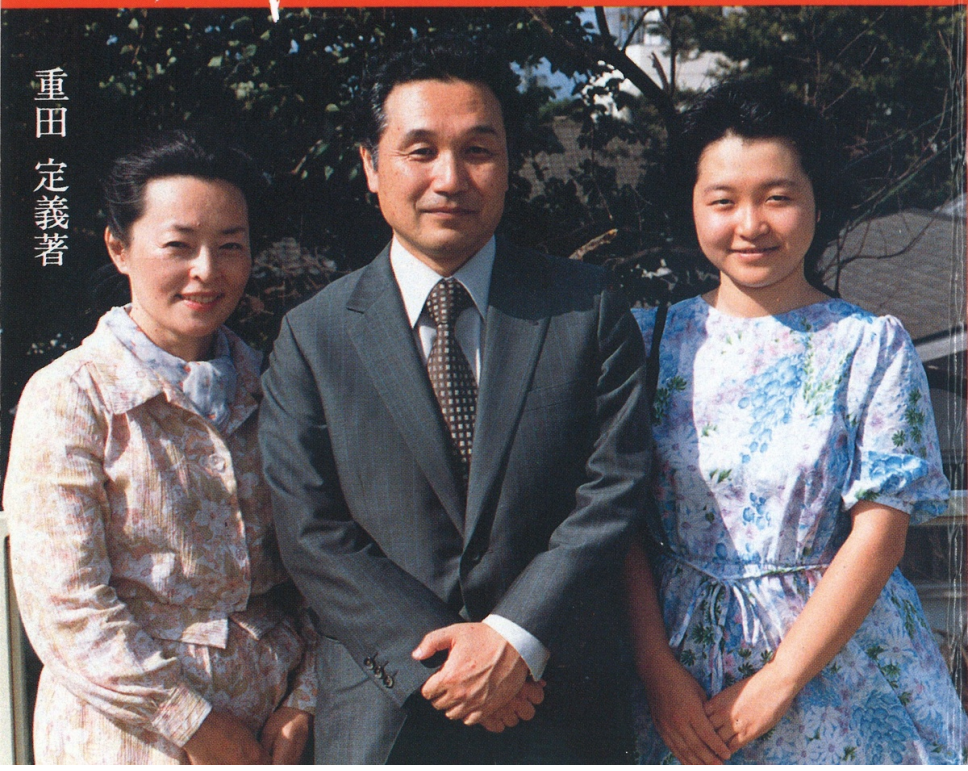
私達の國籍は天にあります

やさしい聖書の福音メッセージ集

ピリピ三章二十節

重田 定義著





神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された
時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのです。
（ローマ人への手紙１・20）



私達の国籍は天にあります

やさしい聖書の福音メッセージ集

重田定義著

序にかえて

「私たちの国籍は天にあります」と題する神様からの良き知らせ―福音―のメッセージ集を出版するにあたって、どうしてこの本が作られたか、またどうしてこの題名をつけたかをご説明しなければならないと思います。

私たち夫婦に、一九六三年、神様から一人の女の子が与えられました。結婚してから十年目に与えられた娘まりは私たちにとってたった一人の子供でありました。まりは小さい頃から病気らしい病気もせずに素直で明るい子供として成長しました。父親である私にとって一人娘のまりは、私の宝であり、また希望でもありました。私からすべてのものが取り去られても、まりさえいれば満足という気持ちでした。

幼い頃から自然や動物が大好きであった彼女は、慶応女子高校に入学する頃からそれらをお造りになった神様の存在を素直に認めることが出来たようですが、同時にその自然が人間によって大きく破壊されて行くことに心を痛めておりました。またその頃から、親の

影響もあって、医者になろう、それも病人の心の痛みや悩みが理解できるような医者になりたいという思いが強くなり、一九八一年の春、筑波大学医学部に入学しました。

その娘が、入学した年の秋から抑うつ症のために苦しみ始めた時、私はほんとうに驚きました。早速治療を学校にお願いしました。そして、その時、私たちの信仰の友人から吉祥寺キリスト集会の宣教師ゴットホルド・ベック兄を紹介していただきました。神様はベック兄を通して、まりに聖書のみことばを語ってくださり、彼女がそれまで求め続けても得られなかったほんとうの救いを与えてくださいました。まりはイエス様の十字架のゆえに自分の罪が赦されていること、そして信じた時にイエス様のよみがえりに与る永遠のいのちが与えられることを素直に信じ、救われました。親の私たちもその直後にそれまで与えられなかった救いの確信を与えられ、まりの後に続いて水のバプテスマを受けました。

その後、一年間抑うつ症の症状は消えたように見え、彼女は喜んでイエス様に従う信仰の生活と医学生としての生活を送っていました。けれども、一九八三年一月から、再び抑うつ症状が強く起り、主治医の指示によって休学して治療に専念しました。しかし、よく効く薬は強い副作用が出て使えなくなり、治療はなかなか思うように行きませんでした。そして、治療の一環として、主治医の指示によってしばらく高松の宣教師のお宅に預かっ

ていただいておりましたが、その年十二月十三日に高松でこの世のいのちを終えました。

抑うつ症という苦しい心の病気に罹って以来、まりは必死にこの病気と戦いました。医師の指示にしたがって出来る限りの努力をしました。私も医者でありながら、愛する娘の苦しみを取り除いてやることの出来ない自分の無力さをかみしめながらも妻と共に出来る限りのことをしました。そして、私たちは御心ならばどうかまりの病気を癒してください、と心から祈りました。けれども神様の御心は、まりを天国に呼び戻してくださることだったのです。どうしてあのように健康で明るく、優しく、素直で、自分のためには何も欲しがらなかったまりが、純粋に医師として神様のために、人のために働きたいと願っていたまりが、あのような心の病気にかかり、この世を去らなければならなかったのか、今の私たちにははっきりわかりません。原因を考えればいろいろと心に浮かびますけれども、愚かな人間の知恵で考えることが正しいとは言えませんので、それをこの世で知ろうとは思いません。やがて天国でまりと再会した時にすべてのことは明らかになります。そのうえ、その時にはもう何も知る必要がないほどの幸せにつつまれて、永遠に一緒に暮らすことが出来るのです。

ところで、人間は肉体と精神（心）と霊（魂）から構成されています。肉体と精神は動

物も持っています。動物も喜んだり悲しんだり人間の命令に従ったりします。これらは精神の働きです。けれども、霊は神様と応答するために人間だけに与えられています。このうち、医療の対象となるのは肉体と精神の病だけです。すべての人間が生れながらに持っている霊の病気―罪―は医者は全く関与することが出来ず、神様だけがそれを癒すことがお出来になります。まりの精神は病みましたが、彼女はイエス様を受け入れた時に罪という霊の病が癒されて、永遠のいのちを持っていましたから、まりはこの世を去った時、ただちに天国に行くことが出来たのです。

残念なことに、まだ一般社会でも、またキリスト者の間でさえも、このことをよくご存じない方は精神の病を何か恥ずべきもののように考える風潮があります。また、信仰と心の病いを混同して、信仰が弱いからこのような病気に罹るのだと考え、信仰によって治させようとする場合があります。けれどもこれは間違っています。信仰の強い弱いに拘らず誰でも癌に罹る可能性があると同様に精神の病に罹る可能性もあるのです。精神の病に対する研究もだんだんと進んで来て、いろいろなことが解明されつつあります。今でもすでにうつ病の原因が脳内の或る化学物質の過不足あるいは伝達段階での不調にあることが明らかになって来ています。肉体の病と同様に精神の病も適切な医療を受けることが必要な

のです。

私たちの宝であったまりがこの世を去った時から今日まで、私たち夫婦は寂しくはありましたが、絶望したことはありません。なぜなら、まりも私も妻も天に国籍を持っているからであります。私たち家族は皆イエス様の十字架による罪の赦しを信じ、永遠のいのちを持っておりますから、ひと足先に天に行ったまりに必ず再会することが出来ます。これは、私たちの想像で考えたことではなく、私たちを造ってくださった神様が御子イエス様の十字架とよみがえりによって保証してくださっている事実であります。まりが召されてから今日まで、考えられないような力で私たちを守ってくださったことによっても「わたしはあなたを、わたしの義の右の手で守る」とおっしゃる神様のみことばの真実さを体験することが出来ました。

「宝のあるところに心もあります」と聖書に書いてありますように、私たちの心はすでにまりとともに天にあります。けれども、私たちはまりがこの世にあった時にどんなにイエス様の救いを一人でも多くの方に伝えたいと願っていたかをよく知っています。そして、何よりもこのことは神様ご自身が願っていらっしゃることであります。私たち家族三人を十字架の贖いによって、永遠に生きる者としてくださったイエス様の愛に答えるためにも、

また、まりが地上にいた時に切に願っていたように、私たち夫婦はこの世のいのちのある限りイエス様の救いを一人でも多くの方にお伝えしたいと祈りました。すると、半年後の一九八四年六月から家庭集会を始めるように導かれたのです。以前には全く考えてもいなかったことでした。それから今日まで毎月一回の家庭集会は神様からの祝福をいただき、良き助け手も与えられて、続いております。

そして、まりが召されて三年目の記念日を間近にして、何をするべきか神様に祈っておりましたところ、この本を出版するように示されたのです。内容は、毎月の家庭集会で、また吉祥寺キリスト集会で、あるいは軽井沢の修養会で私が福音のメッセージを取りつがせていただいた時の録音テープの中から選んだものです。聖書の知識に乏しく、ほんとうに拙く、未熟なことは、私自身が一番よく知っておりますが、私の力は弱く、また知恵は愚かであっても聖書のみことばは力そのものです。聖書を通して神様が私に示してくださっていることを、御霊の助けによってそのまま取りつがせていただきました。録音テープから文字に変える作業をし、表紙の題字を書き、野の花の写真を撮ったのは妻であります。そして、姿は見えませんけれども、この本を出版する原動力になっているのはまりです。まりがいなければ、家庭集会もなく、この本の出版もあり得ませんでした。したがっ

て、この本の著者は私だけではなく、私たち親子三人なのです。しかし、このように導いてくださったのは神様であることは申し上げるまでもありません。

なおここで一言付け加えさせていただきたいことがあります。それは私の取りつぐメッセージには必ずイエス・キリストの十字架による罪の赦しについて、よみがえりによって与えられる永遠のいのちについて述べられているということです。お読みになって、ああまたか、とお思いになるかも知れませんが、これこそ聖書全体を通して神様が私たちに提供してくださっている救いそのものだからです。教会に行っても、聖書を読んでも、神様ご自身がいのちがけで提供してくださっているこの一方的な恵みを素直に受け入れることが出来なければ、救いをまわりから見ているだけで、自分のものにすることは出来ません。これは私自身が体験的に示されたことであります。そのために聖書のこの核心について、メッセージのたびごとに語ってまいりました。

どうか、お読みくださる皆様がその事実を心にとめてくださり、一人でも多くの方がこの本を通してイエス・キリストの愛と恵みの結晶である救いのみ業を、ご自分のものとしてお受け入れになることが出来ますように、心からお祈りいたします。

神様のご栄光がこの本を通して現わされますよう切に祈りつつ、序にかえさせていただ

きます。

最後に、装幀の奉仕をしてくださった、グラフィックデザイナー飯守恪太郎兄に心から感謝申し上げます。

一九八六年十二月

重田　定義



まつむしそう

目次

序にかえて……5
一　わたしのところへ来なさい。休ませてあげます……16
二　医者に治せない病気……38
三　罪（SIN）から神の子（SON）へ……60
四　あなたの誇りは何か……80
五　ほんとうの自由……96
六　天国への招待にふさわしい者……114
七　神の標準と人の標準……132
八　三つのうめき……148
九　主イエスの祈りに支えられる信仰……164
十　愛する者との再会……182

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

（マタイの福音書11・28～30）

このところ続いて、聖書のなかでイエス様が語られた有名なみことばについて、ご一緒に考えてまいりました。今日も聖書のなかでイエス様ご自身が話された最も有名なみことばの一つについて、しばらく考えてみたいと思います。それはマタイの福音書11章28節から30節に書かれています。

これは、とても有名な箇所でありまして、キリスト者は皆知っていると思いますが、よ

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

く読んでみますとイエス様が驚くべきことをおっしゃっていると感ぜざるをえないのであります。28節を見ますと「わたしのところに来なさい。わたしが休ませてあげます」とおっしゃっています。いったい今までに誰がこんな呼びかけをしたでしょうか。この世の偉人、賢人、あるいは聖人といわれている人たちもこのような呼びかけはしなかったのではないかと思います。もししたとしても、その言葉通りにまことの休息ほんとうの安らぎを与えることは出来ないはずであります。

このような呼びかけをするイエス様とは誰だろう、いったい何の権威をもってこんな呼びかけをすることが出来るのだろう、という疑問をお持ちになっても当然であり、おかしくないのです。ここですぐに答えを申しあげますと、イエス様は神であるから、神の権威をもってこの呼びかけをされたということです。イエス様が神であるということは、聖書のいたる所に書いてあるのですが、神でありながら私たちを救うために人となって神の座から降りて、この世界に来てくださった方なのであります。

私たちが神という時、すぐに日本の神々や、ギリシャ、ローマの神々を思い浮べますが、イエス様という神様は、そのような人間が作った偶像の神々とは全く違って、私たち人間を含めて宇宙万物を造られた方であり、造られただけではなく、それらを支配しておられ

る、「アルファでありオメガである」とご自身がおっしゃっておられるように、初めから終わりまで、永遠から永遠にわたって存在し、生きて働かれるまことの神、聖書で私たちにご自身を現しておられる神なのであります。

今、私が申しあげましたことが聖書の中のコロサイ人への手紙1章15節から20節に書かれておりますので、お読みいたします。

御子（イエス様）は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生れた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。

また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生れた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

（コロサイ人への手紙1・15～20）

このようにイエス様は神の御子ですから、神であります。そして父なる神様は御子イエス様によって天地を造られた、とここではっきり書いてあります。ですからイエス様は天地を造られた方であります。その神であるイエス様が権威と愛をもって、「わたしのところへ来なさい。休ませてあげます」と呼びかけてくださっているのであります。

はるかに遠い天から私たちに「来なさい」とおっしゃっているのではなくて、私たちの近くへ、この地上へ降りて来て、「来なさい」と言ってくださっているのであります。イエス様は「見よ、わたしは、世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」とマタイの福音書28章20節でおっしゃっています。またヨハネの黙示録の3章20節で「わたしは、戸の外に立ってたたく」と言っておられますように、イエス様は目には見えませんけれども私たちのすぐ側におられるのです。

ではイエス様が呼びかけておられる対象は誰でしょうか。誰に対してイエス様は呼びかけていらっしゃるのでしょうか。疲れている人、重荷を負っている人すべてに対してなの

であります。

ですから、自分で人生の勝利者であると思っている人たち、すなわち、才能とか財力、権力、名声、あるいは健康などを誇って、この世のもので満ち足りている人たちに対してイエス様がおっしゃっているのではなくて、この世のものを追及すればするほどそれらは空しいと感じている人、あるいは、まことの価値のあるものを求めながら、それがこの世のものの中にはないことを悟った人、自分の努力の限界や、弱さ、無力さ、愚かさが骨身にしみている人、また身体的、精神的、経済的、あるいは社会的な負担にうちひしがれて苦しみ悩んでいる人、このような人々すべてに対してイエス様が「来なさい」と言っておられるわけであります。

伝道者の書の2章20節、22節、23節をお読みいたします。

私は日の下で骨折ったいっさいの労苦を思い返して絶望した。実に、日の下で骨折ったいっさいの労苦と思い煩いは、人に何になろう。その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これも、またむなしい。

（伝道者の書2・20、22、23）

伝道者の書は「ソロモンの栄華」という言葉でよく知られている、ソロモン王によって

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

書かれた聖書の中の有名な書であります。彼はこの世で栄華の限りを尽くした王様でありましたが、それだけでなく、非常な英知をも神様から与えられていた人でありました。そのうえに、彼は大変な努力の人であったことが聖書に記されております。そのようにおよそ人間がこの世で持ち得るすべてのものを持っていたソロモン王は、この世に人の心をほんとうに満たすものがあるかどうかを知るために、そのたぐいまれなる知恵や知識をすべて使い、あらゆることに努力し、すべての快楽をも味わってみたのです。その結果、彼が知ったことがこの箇所に記されているわけであります。

この世には目に見えるものだけに心が奪われている人々、この世のことにだけ夢中になっている人々がいます。そのような人にはイエス様の呼びかけは聞こえません。けれどもこのような人々も、いったん自分が心奪われていたものがまったく空しいことに気がついた時、また人生の重荷を強く感じ始めた時には、自分の無力さ、愚かさを知るようになります。そしてその時こそ、かたくなな自我が砕かれて神様に対して固く閉ざされていた心の扉が開かれて来るのであります。その人が、自分が誇っていた城が崩れるのを体験した時に、「私は無力です、神様助けてください」と神を呼び求めることが出来るようになるのであります。そしてその時こそ、イエス様の呼びかけてくださる声が心に聞こえるよ

うになって来るのです。

イエス様はマタイの福音書の9章12、13節でも、「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」とおっしゃっています。確かに医者を必要とするのは丈夫な人ではなく病人です。しかし、このみことばの意味は健康だと思っていても、実は皆病人である、また自分は正しいと思っているだけであって人間は一人として正しい者ではないということなのです。正しいと自分で思いこんでいるような人はイエス様に対して耳を開こうとしないわけですね。そのことが、ここにはっきりと書かれているのです。

では、いったい、人生に疲れとか重荷をもたらす原因は何か、その根本的な原因について考えてみましょう。神様は人間を造られた時にご自分に似た姿を与えてくださいましたが、それは人間をご自分と一番近い存在として扱いたい、言い替えれば、子どものようであって欲しいという思いをもってお造りになりました。そのようにして、愛の対象として造った人間が、神様を愛し敬い、子が親に従うようにご自分に従うことを期待していらっしゃったのであります。ところが、神様によって造られた最初の人間であるアダムとエバはこの神様の愛に背いて、神様ではなく自分自身を愛し、自分の欲望に従うようになって

しまったのです。ご存知のことと思いますが、神様から「これだけは食べてはいけない」と言われた善悪を知る木の実を食べてしまい、エデンの園から追放されたのであります。その結果どうなったかということを創世記から少しお読みしましょう。神様は、

女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」また、アダムにこう仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。」

（創世記3・16、17、19）

とおっしゃったのです。

すなわち、人間は、出産の苦しみ、労働の苦しみ、生活の苦しみあるいは不安、そのうえ死に対する恐れと悲しみ、こういったものが神様に背いた結果与えられたわけです。これが、人生の疲れとか重荷の根本の原因になっている、神様に背いた罪の結果なのです。ですからこの罪の解決がなければ、人生の疲れや重荷から解放されて真の平安を得ること

は出来ないのであります。そしてイエス様はまさにこのような人間をあわれんで、その罪から救い出すためにご自身が人の姿をとってこの地上まで来てくださり、私たちの代わりに罪を負って十字架で死んでくださったのであります。ペテロの手紙第一2章22節から25節までお読みします。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられてもおどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

（ペテロの手紙第一2・22～25）

とペテロを通してイエス様がおっしゃったように、罪を犯したことのない神であるイエス様が、私たちのためにほんとうに柔順に、柔和に、心やさしく、へりくだって、まさに十字架の死にまでもご自分を低くしてくださり、私たちの罪を身に負って解決してくだ

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

さったのであります。ですから、先ほどの「わたしのところに来なさい。わたしが休ませてあげよう」という言葉を真実をもって言うことの出来るのは、ただ一人イエス様だけなのであります。

その呼びかけに答えてイエス様のもとに行った時に、私たちは今まで知らなかった、神に背いていたという罪の大きさとその報いの恐ろしさ、つまりこの世の一時的な苦しさとは比べようもない死後の裁きによる永遠の苦しみ、この恐ろしさに目が開かれて慄然（りつぜん）とするのであります。そして自分自身が負わなければならなかったそのような恐ろしい罪の報いを代わって身に負ってくださったイエス様の深い愛を知り、初めて自分の罪を悔い改めてイエス様を救い主として受け入れることが出来るようになるのです。

このような驚くべき愛をもって、私たちの罪を赦してくださったイエス様は、さらに十字架の死の三日後によみがえってくださり、信じる私たちにもよみがえりのいのち、永遠のいのちを与えてくださったのであります。このことによって、私たちキリスト者はこの世のいのちが終わると、ただちに天国に入ることが許されております。イエス様の復活はたくさんの証人によって歴史的に裏付けられており、イエス様が神であられることをはっきり事実として私たちに証明しているのです。

そして私たちがイエス様を受け入れた時、ほんとうに深い平安が心の奥に与えられます。これは、イエス様を信じる者にイエス様が与えてくださる平安であります。これもよく知られている箇所ですが、ヨハネの福音書14章27節に、

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネの福音書14・27）

世が与える平安とは違うイエス様ご自身の平安、それを与えるとおっしゃっております。いつかは過ぎ去る、限りのあるこの世の平安ではない神様の平安を、信じる者に与えると約束してくださっているのです。それはイエス様がいつも私たちと共にいてくださり、支えてくださり、慰めてくださることによって与えられる平安であり、永遠に続く平安であります。

この世には疲れ、苦しみ、重荷にあえぐ人たちと、人生が楽しく、得意になって暮らす人たちという全く対照的な二通りの人たちがあります。なぜでありましょうか。イエス様は、ルカの福音書6章20節から26節の間でこのようにおっしゃっておられます。

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話しだされた。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものですから。いま飢えている者は幸いです。あなたがたは、やがて飽くことができますから。いま泣いている者は幸いです。あなたがたは、いまに笑うようになりますから。

しかし、富んでいるあなたがたは、哀れな者です。慰めを、すでに受けているからです。いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。みなの人にほめられるときは、あなたがたは哀れな者です。彼らの先祖は、にせ預言者たちをそのように扱ったからです。」

（ルカの福音書6・20～26）

ここを読みますと、貧しい人、飢えている人、泣いている人は神様によって愛されている人であることがわかります。ではなぜ愛されている人々が悲しんだり、苦しんだり、泣いたりしなければならないのでしょうか。それは神様がその人たちを滅びから救い出そうと、ご自分に目を向けさせるために彼等の心を砕いてくださっているからなのです。その人たちは神様が多くの人の中から選び出してくださった人々なのであります。エペソ人へ

の手紙1章4節から11節にそのことが書かれておりますのでお読みいたします。

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

（エペソ人への手紙1・4～11）

このように、私たちが救われて神の子とされることは、我々の生れるはるか前から神様のご計画の中に予め定められていたということがわかります。何という奥深い壮大なご計画であり、お恵みでありましょうか。

イエス様は黙示録3章19節でこう言っておられます。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（ヨハネの黙示録3・19）

まことに深いイエス様のご配慮であります。ですから神様から愛されている人はほんとうに幸せであります。その人は今苦しみや悲しみを通してイエス様の呼びかけに心の耳が開かれて応答することが出来、その重荷をイエス様のもとに下ろすことが出来るからです。

ローマ人への手紙8章28節にこのように書かれております。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ人への手紙8・28）

神のご計画に従って召された人々、つまり、イエス様を信じる人々のためには、すべてのこと、それが苦しみであろうと悲しみであろうと、いかなることであっても、神様は愛をもって益と変えてくださる、その人にとってほんとうの幸せにつながることとしてくださるのであります。

しかしこうして神様を信じ、罪赦されても、私たちは肉体を持ってこの地上に生きている間は、気づきながら、あるいは気づかずに自分中心に判断したり行動したりしてしまうという、人間の弱さを持っております。けれども罪赦されてもなお罪を犯してしまうような私たちであることを、イエス様は初めからご承知のうえで救ってくださったのであります。そして一度罪を赦された者はもう罪に問われることがないのです。神様の約束に嘘、偽りはありません。テモテへの手紙第二2章13節に、

私たちは真実でなくても、彼（イエス様）は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。

（テモテへの手紙第二2・13）

と書かれております。私たちは一人残らず不真実な者であります。真実であろうと思ってもそれが出来ない。しかしイエス様には一点の曇りもなく、ご自分をすら否むことがお

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

出来にならないほど、絶対的に真実なお方なのであります。「イエス・キリストはきのうもきょうもいつまでも変わらない」と言われておりますように、永遠に真実なお方ですから、その方の約束は決して変わらないのです。ヘブル人への手紙10章17節に、

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。

（ヘブル人への手紙10・17）

とイエス様ははっきりと約束しておられます。ご自分のいのちに代えて赦してくださった私たちの罪は、イエス様によっても、父なる神様によっても思い出されることはもう決してないのであります。また罪赦された罪人にしかすぎない我々のために、イエス様はなおも重荷を負ってくださり、私たち自身さえも負ってくださっているのです。イザヤ書46章3節から4節を開いてみましょう。

わたしに聞け。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ書46・3～4）

私たちは少しも知りませんでしたし、気もつきませんでした。けれどもイエス様は私たちが生れる前からになってくださり、しらがになってまでも背負ってくださる方であり、そのように私たちを、どんな時でも、私たちが忘れているときでも、一緒にいてくださり、このように考えられないような愛をもって愛してくださる方なのであります。このイエス様に対して、私たちは、

ほむべきかな、日々、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。

（詩篇68・19）

と感謝せざるを得ないのです。

最初のマタイの福音書11章29節、30節に戻りまして、ここでイエス様がおっしゃっているのはどういうことなのかを考えてみたいと思います。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」とあります。ここで言われておりますくびきというのは、荷車や鋤（すき）などを引かせるために牛や馬の首にかける横木なのです。私たちはよくこの世のくびきは重いなどと申しますけ

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます。

れども、確かに私たちは重荷を負って、牛や馬のように、それを引張って人生を歩んでおります。この世のくびきはほんとうに重いのですけれども、イエス様に救われた者はこの世の重いくびきをイエス様に取り除いていただいて、ここに書いてありますようにイエス様のくびきを負わせていただくわけですね。イエス様のくびきは軽いのです。その軽いくびきを負ってイエス様と共に人生を歩む、イエス様と共に生きる、これが私たちキリスト者の生活であります。その軽いくびきとはどんなものでしょうか。それは心優しくへり下だっておられるイエス様のくびき、すなわち、柔和と謙遜のくびきであります。イエス様がどれだけ謙遜であられたかということをイザヤ書53章4節から8節までの箇所から見てみたいと思います。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

（イザヤ書53・4～8）

このように、私たちのためにイエス様は柔和と謙遜（けんそん）の限りを尽くして、十字架にかかってくださったのであります。救われた私たちもこのイエス様のようにへりくだって、柔和と謙遜（けんそん）のくびきを負いながらこの世の人生を歩むようにとイエス様は望んでおられます。そして我々がこのくびきをイエス様と共に負うとき、常にたましいに平安が、そして安らぎが与えられます。何故ならばイエス様の与えられる平安は神の国の平安であり、神の国が平安であるのは、そこではすべてが神の御心によって支配されているために、すべてが柔和であり謙遜（けんそん）であるからであります。イエス様と共に負うこの柔和と謙遜（けんそん）のくびきは、ほんとうに軽くて負いやすく、どんなに弱い人でも負うことが出来ます。むしろ弱い人ほど負いやすいのではないかと思うのです。このくびきが重くて負いにくいと思う人は、自

我とか、ごう慢とか、高ぶりなどというものをたくさんこのイエス様の軽いくびきに自分でつけてしまっているから重く感じるのではないでしょうか。

ところで現代人の最も嫌うものはくびきなのです。人々はすべてのくびきから、すべての束縛から逃れようとします。そしてそれが自由だと思い込んでいます。けれども、その人は哀れにも永遠のいのちと平安を得ることの出来る神様の一番軽いくびきを捨てて、滅びに至るこの世の重いくびきに縛られていることに気がつかないのであります。人生の悲しみ、苦しみなどすべての悩みは、先ほども申しあげましたように、最初の人アダムとエバが神様の最も軽いくびきを捨てたことに始まったわけです。しかし、一度失われた人間のほんとうの幸福、あるいは神の子としての特権を回復してくださるために、今、私たちに神様のあわれみと恵みによってその神様のくびきがもう一度差し出されているのであります。

では、私たちはそれを受けるのに、何かふさわしいことをする必要があるでしょうか。何もありません。ただへりくだって、感謝して神様の恵みを受けるだけでよいのです。何故ならそれが神様の最も喜ばれることだからであります。

「人生の重荷を負ってあえいでいるあなたは、わたしのところに来なさい。わたしがま

ことの休息を、やすらぎを与えましょう。そして、柔和と謙遜のくびきを負って、わたしと共に歩みましょう。このくびきは軽く快く、心にほんとうの平安を与えます」とイエス様はあなたに呼びかけていらっしゃいます。あなたの心の戸のすぐ外で、あなたの側に立って呼びかけていてくださるのです。イエス様は柔和で謙遜な方でありますが、あなたが自分の手で心の戸を開けない限り、あなたが自分の足でイエス様の前に立たない限り、神の権威であなたの所に無理に押し入って来ようとはなさいません。イエス様はあなたが、あなた自身の意志でご自分の所に来られることを、心の扉を開かれることを望んでいらっしゃるのです。

今日初めて話をお聞きになった方もあると思いますが、イエス様の前に行くのに聖書の知識はいりません。いくら神学を勉強しても、それでイエス様が救い主であるということを頭ではなく、心で受け入れることは難かしいのです。ただ素直にイエス様の呼びかけに答えて、今のままの姿であなたがイエス様の前に出られることだけをイエス様は望んでおられます。その時にイエス様は約束通り、まことの安らぎを与えてくださいます。イエス様はあなたのすぐ側でそれを切に待っていらっしゃることをどうか知っていただきたいと思います。


ぎぼうし

医者に治せない病気

〔軽井沢保育園保護者連合会講演会にて〕

今日皆様にお目にかかれてお話が出来ることを感謝しております。遠い所からおいでになった方もいらっしゃるようですが、私も昨夜東京からまいりました。せっかく皆様がお忙しいところをおいでくださって私の話を聞いてくださるのですから、何かおみやげになることをと思って考えてまいりました。御承知のように私は医者でございますけれども、今日お話いたしますなかで、ぜひとも聞いていただきたいと思うことがあります。これは恐らく他のどんな医者も話したことがない病気、恐らく初めてお聞きになる病気だと思います。その病気について、またその治療はどうしたらよいか、ということも是非知っていただきたいと思います。

日本は大変豊かになってまいりました。何でも欲しいものが手に入るようになりました。食べ物でも衣服でも手に入る。では、あと残っているもので何が欲しいか、と考えました

時に、最後に残るものは健康です。健康を自分のものにしたい、それと似たようなことですが、長生きをしたい、長寿を手に入れたい、と思うようになってまいります。アンケートなどで調査しましても、そういう答えが一番多いのです。日本人の寿命は世界一で、最近の統計では男が平均七十五歳、女性が八十歳です。今まで日本が目標にしていた長寿国というのは北欧諸国、スウェーデンやデンマークですが、今やこれらの国々を追い越して世界のトップであります。

男七十五歳、女八十歳というのは、生れたばかりの赤ちゃんがこれから平均してどのぐらい生きられるかということを予測して出したものですから、例えば私は六十歳になろうとしておりますが、この私が七十五歳まで生きるということとはちょっと違うのですけれども、いずれにしても、平均余命、平均寿命が大体その国の健康度を測る大きな物差しになります。その点で日本は既に健康も世界一である、と言ってもいいのですね。

どうしてそうなったかと申しますと、かつてあったいろいろな伝染病で死ぬ人がほとんどいない、今死ぬのはほとんど成人病といわれる病気によるのです。また生れる人も昔に比べて少ない、少なく生んだ赤ちゃんの死亡率が減った、少産少死というパターンに日本がなってまいりました。

それにともなって起っている問題が人口の老齢化であります。お年寄りの割合いがどんどん増えております。老人についてはいろいろな定義がありますけれども、私どもは六十五歳以上を老年といっております。ちなみに、統計で見ますと、この老人の人口に占める割合いが今一〇％です。ところが、西暦二千年、昭和七十五年になりますと、老人の割合いは一六％になります。さらに、二十年後には何と二二％が六十五歳以上の人で占められるということになるのです。このように大変老齢化が進んでいます。

かつて私たちがアメリカやヨーロッパに行きますと、何と老人が多いのかと目につきました。しかし、今私たちが日本の街を歩いておりますと、老人の方々の姿が非常に多い、昼間街を歩いている方、電車やバスに乗っておられる方にご老人が大変多いですね。このままの少死が続きますと、ますます老齢化の傾向が顕著になってまいります。

ところがいっぽう、私も毎日医学部に通勤しておりますけれども、大学病院の待合室を見ますと患者さんが一杯です。これはどこの病院でも同じで、患者さんがあふれています。長寿国でありながらなぜそんなに病人が多いのかと申しますと、一つは、今は誰でも病気になればすぐに医療が受けられるという体制が出来ているからです。昔はなかなかかかれなかったお医者さんにすぐにかかれる、またそのように患者さんの意識も高まって来てい

る、少し悪くなったら医者に診てもらうということが徹底してきた、というのも事実です。

ですから、長生きにはなってきたけれど、健康な人が増えているかというとそうではない、自分はどこか悪いのではないかという思いを持っている人がずいぶんいます。健康と病気の境目はなかなかつけにくいのですが、言わば半健康、あるいは半病人という人々が多くなって来ております。私たち医者も一生懸命に診察、治療しているのですけれど、なかなか病気が減らないのです。

では病気の中身は昔と今とはいったいどう変わっているのかと言いますと、これが様変わりしております。昔怖かった病気、どんどんその病気で死んだというような病気は少なくなっている。例えば、伝染病でいいますと、天然痘、これで死ぬ人が昔は大変多かった。しかし今では天然痘の病人は世界中で一人もいなくなりました。昭和五十五年に、ＷＨＯ、世界保健機構から、世界中の国々から天然痘が消滅した、撲滅されたという宣言が出されました。皆様方一人一人種痘の跡がありますが、もう種痘する必要が無くなりました。天然痘が無くなったからです。ところが天然痘のウイルスは存在する。どこにかと申しますと、いろいろな研究所の試験管のなかに生きております。それだけなのです。病気としてはもうないのです。

かって日本では結核が蔓延して、多くの若い人が死にました。また私たち位の年令では、死なないまでも、若い頃結核にかかって長い間療養した人はたくさんいらっしゃいます。しかし今、結核で死ぬ人は極めて少ないのです。らいも怖い病気でしたけれど、今では非常に少なくなりましたし、らいで死ぬ人はなくなりました。かかってもごく軽症で、しかも治ります。そのように、昔、怖い怖いと言われていた病気は今や姿を消しつつあります。

ところが、このように医学が進歩し抗生剤のような薬が出来たから、伝染病はなくなったかと言うとそうではありません。新しい伝染病が出て来ました。一番新しくて恐ろしい伝染病はエイズであります。これは前はなかったのです。私たちは習ったこともありません。ごくごく最近、十数年前にアフリカのある地方で風土病として発生しました。それからアメリカやヨーロッパに蔓延して、今や日本にも入って来ました。エイズというのは日本語では後天性免疫不全症候群というちょっと難しい名前で呼ばれております。一言で言えばこれはウイルスで起こる病気です。このウイルスは、人間の血液の中のりんぱ球に取り付いてこれを破壊してしまう。りんぱ球というのは、外から侵入してくるウイルスやかびや細菌などを殺す大切な役目を果たしているものですから、それが全部やっつけられると、人間は無抵抗になってしまいます。恐ろしい病気を持った微生物からまったく裸に

なってしまうのです。

軽井沢の空気は日本でも有名なほどきれいですが、それでもここに培地を置いて、十五分間蓋を開けておいてから閉じて、孵卵器に入れて培養しますとそこにいろいろな細菌がわーっと生えてきます。こんなきれいな空気でもそうなのです。私たちはそういう空気を吸っているのですが何ともないのです。というのは皆さんの体の中に生れつき、赤ちゃんでも誰でもそういった神様が与えてくださった防衛機構がありますから、病気にならないわけです。けれどもその機能をやっつけるウイルスが現れましたから大変です。今のところ我々はそれに対して闘う武器を持っていません。感染して発病しますと一〇〇%死にます。エイズのウイルスで死ぬのではありません。かかった人たちは無抵抗の状態になっていますから、吸い込んだ微生物が全部その人の体の中で繁殖してそのために死ぬのです。エイズで死ぬ一番の原因はかびによる病気です。かびで肺炎が起こります。普通、かびで肺炎になるということはほとんどありません。ところがエイズにかかると肺にかびが繁殖しそれによって呼吸困難が起きて、苦しみながら死ぬわけです。

エイズはしかし、今のところ特殊な感染経路をとっております。セックスによって、また特に同性愛によって感染します。ニューヨークのマンハッタンには同性愛の人がたくさ

んいるそうです。そのためにマンハッタンにおける死亡率の第一位はエイズになりました。癌などではないのです。

また、日本で今増えている病気の一つにB型肝炎、血清肝炎というのがあります。このB型肝炎のウイルスを持っている人は日本で二百万から三百万人と言われており、もっと増えて来るでしょう。このウイルスも非常にしつこいのです。普通のウイルスは熱を加えると死にますが、このウイルスは死なない。血液を通して感染しますから、輸血が大変怖い。ですから輸血は、血液の中にこのウイルスが入っていないかどうか、よく調べてから行いませんと、病気は輸血によって治っても、輸血をしたためにB型肝炎にかかる可能性があります。この病気は何が怖いかと言いますと、だらだらと長引いてついに肝硬変を起こす、あるいは更に肝臓癌が発生する場合もあるからです。

まだたくさんあります。心身症という病気、これは昔もありましたけれど、今は非常に増えています。心身症とは、一口に言いますと心で起こる体の病で、ストレスなど心理的原因で体にいろいろな症状が出てくる病気です。人間社会がたいへん複雑になり、仕事の上や人間関係の上で負担が多くかかって来て、その荷が重すぎると、それが引金になって起ります。普通、皆様方が体の病気だと思っているものの中に心身症である場合がたくさ

んあります。高血圧もそうですし、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、糖尿病、心筋梗塞その他いろいろな病気がストレスが原因で起ります。ですからこれらの症状が出た時に、ただその病気の治療をするだけではなくて、原因である心の問題を解決しなければなりません。お子さんでも心身症にかかる方がたくさんあります。

また、うつ病、抑うつ症、これは昔あまりなかった病気ですが最近はずっと増えています。これも世の中が急速に変化して、いろいろな意味での心の重荷が重くのしかかり、それが引金になって起こっている場合が多いと言ってもいいと思います。まだいろいろありますが、一つの病気が少なくなるとまた新しい病気が出て来る、社会環境や心理的な環境、人間関係のあり方が変わって来ると、どんどんと新しい病気が出て来ます。

このように医学と病気は追いかけごっこをしているわけです。私たちはいつもベストを尽くして研究をし、診療をしておりますけれども、医学の限界をいつも感じます。結局私たち医者がしていることは、ちょうど消防士が火事が出た時に火を消しますが、それと同じことをしているわけです。火事が起こると、それ行け、といって火事場に行って火を消します。するとまた別の所に火の手が上がってまた駆けつけて消す、それが大体医学、医療のやっていることであります。何が起こるかわかりません。そうやって、私たちはあち

こち火を消してまわっておりますけれど、人間として誰しも持つ夢である不老不死、いつまでも若くいつまでも死なない、これが医学で達成出来るかと言いますと、それは出来ないのです。その研究はしておりますけども、はっきり申しあげてそれは出来ません。

臓器移植というのがあります。悪くなったら取りかえて健康な臓器を移植する方法です。現在は腎臓でこれが出来るようになり、心臓や肝臓でも出来ることがわかってきました。では悪くなくなればそうやってどんどんと取り変えて行けばいいじゃないか、と思われるかも知れませんが、そうしてもたかだか数年あるいは十数年死が先に延びるだけです。というのは、いろいろな研究でわかってきましたが、人間の寿命の限界は、どんなに医学が進歩し、医者が努力しても百二十年なのです。これ以上はだめなのです。人間の体を構成している細胞のいのちは、最も良い条件に置いておいた場合でも百二十年以上は生きられない。細胞の中に仕組まれている機構、これを変えることは出来ないのです。ですから、細胞から成り立っている人間がどんなに努力してもそれ以上は生きられない。これは聖書の中で、人間の寿命を百二十歳と神様がきめられたと書いてあるのに一致しています。ずっと昔に書かれたことが、今最先端の医学でわかってきたのです。不思議なことだと思います。

このように、私たち人間は生れたら必ず死ぬことがわかっています。今日いらっしゃった皆様方はまだ若いお母様が多いですし、お子さん方はもっと小さいですから、まだ死ということについてあまりお考えになっていないかも知れません。しかし、私たちは生れたその日からどこに向かって歩いて行くかと言いますと一人一人必ず死というゴールに向かっているのです。後戻りは出来ない。いやだからもう一度お母さんのお腹の中に戻ろうと言ってもそれは出来ません。皆用意ドンでスタートしているのですから。ゴールは死です。それははっきりしているのです。ですから、結局、医学というのは延命の学問、命を先に延ばすということしか出来ないのであって、死に対してはまったく無力なのです。どんな病院でも、もうこの患者さんは駄目だ、ベストを尽くしたけれどもこの患者さんは死ぬのだということがわかった時、医療従事者は死に対して何の対策も持っていないのです。ただ、最近ごくごく短い間の延命の道具がありまして、生命維持装置と言いますが、もうだめとわかった患者さんにそれを付けますと、無理やりにその装置で心臓を動かし、無理やりに肺の中に空気を押しこみますから、もう脳は完全に機能を停止した後も、装置を付けているために顔色が良くて何となく生きているように見える。大変にお金のかかる装置ですが、これを付けるともう医者はなかなかこれを止められません。愛する人がまだ生き

ているように目の前に横たわっている。ご家族は医者に、「どうでしょうか」とお聞きになります。医者は、「装置で心臓は動いていますけれど、止めれば……」となるわけです。昔は医者はご臨終です、と言いましたが、今はその装置が動いている間医者はご臨終ですとは言えません。けれども、その患者さんの脳は既にどろどろに溶けてしまっていたという例が解剖してみると少なくありません。

そこで、こんなことではいけない、と医療従事者たちが考えたことが一つあります。末期医療と言いまして、もうその患者さんにどんな医療の手を尽くしてもだめだ、必ず死ぬ。けれども放って置くことは出来ない、なんとかしてその人が安らかに死ねるように援助をしようという考え方であります。これは最初はイギリスでスタートしたのですが、ホスピスというのがその施設です。

死んで行く人がどんなことを考え、どんな苦しみ悩みを持っているかを、看護をする上での参考のために調べ、分析しましたところ、そういう人々に四つの苦しみがあることがわかりました。ひとつは身体的な苦痛、もうひとつは精神的な苦痛、それから経済的なあるいは社会的な苦痛というものもある、そして最後に霊的な苦痛があるということがわかって来ました。

身体的な苦痛はまだ医学が助けることが出来る、例えば癌の患者さんの場合など痛みが非常に激しく耐えられなくなります。それに対しては鎮痛の手段が講じられます。この分野は大変進歩して来ており、薬で痛みを和らげることが出来ます。それから、精神的な苦痛あるいは社会的、経済的な苦痛、これはご家族や看護する方たちが暖かく接すること、出来るだけ本人の希望をかなえてあげるような配慮をすることなどである程度和らぎます。

問題は霊的苦痛です。これは何かと言いますと、私たちは死ぬとわかった時に、死んだらいったいどうなるのか、どこに行くのか、ということがとても心配になります。元気なうちはあまり考えないかも知れませんが、「どうもだめだ、自分は助かりそうにない」と思うようになりますと、口には出さなくてもほんとうに思い悩むようになります。大変怖くなるのです。ある人はその時神様のことが頭に浮かぶでしょう。「ああ自分は生きている間に悪いことをしてしまった」、「私はまわりの人々の心をあんなに傷付けてしまった」「あの人をとても憎んだ」、「他人には知られなかったけれどもこんな許されないようなことをしてしまった」、「うわべはきれいに見せかけていたけれど、ほんとうの自分はとても醜い思いを持って生きてきた」などといろいろな思いが心に浮かぶでしょう。そして「こんな自分はいったい死んだらどうなるのだろうか、地獄に行くのではないだろうか、とて

も恐ろしいことが待っているのではないだろうか」と死が怖くてどうしたらいいかわからなくなってしまいます。

しかし、これに対して医者や看護婦が、「そんなことを心配する必要はありません、絶対に大丈夫です」と言えるでしょうか。言えません。何の保証もないのですから。そこで医者は逃げます。「大丈夫です、あなたはまだまだ死にません。きっと治りますよ」などと言うわけです。けれどもそれは嘘ですね。患者さんはわかるのです、自分がもうだめだと言うことが。そんな大事な時に医者や看護婦に逃げられた患者さんは、もんもんとして苦しみながらこれに対する何らの解決も与えられないままに死んで行きます。

ホスピスが日本でなかなか普及しないのは、その問題に解決を与える人が誰もいないからです。この苦痛や恐怖は医学では治せない病気に人間がかかっていることから来ているのです。いったいそのような苦しみや恐れはどんな病気から起こって来るのかということについてこれから少しお話ししたいと思います。これは「罪」という病気なのです。この病気に人間がかかっていますから、死に対する恐怖が出て来るのです。実は、この病気は人間が一人残らず持っています。

これから先を続ける前にお話ししておかなければならないことがあります。我々人間は

肉体を持っております。その中に精神、あるいは心というものがあります。けれどもこの二つは人間だけでなくて動物も持っております。しかし、人間だけが肉体の中にある心の更に中に持っているものがあります。これが霊なのです。動物でも、痛いとか嬉しいとか、あるいはこの主人について行こうとか、これはしてもいいか、いけないかということはわかります。それは動物も心、精神を持っているからです。判断力と感情と意志は心の働きです。ですから、これら三つのものは人間だけではなくて犬にもあります。

ところが、良心というのは霊の働きです。良心のとがめ、良心のうずきというものを皆様も感じられたことがあると思いますが、不思議なことに、これを持っているのは人間だけなのです。ここでなぜ人間が罪という霊の病気、これは遺伝病でありますが、これを持っているかということについてお話しいたします。皆様はご存じかどうかわかりませんが、人間は創造主である神様によって造られたものです。もちろん、我々人間を造ってくださった全知全能の神様は宇宙とその中にある万物をお造りになりましたが、人間を特別に愛してご自分に似る者としてお造りになったのです。

人間のいのちは尊いとよく申しますね。なぜ尊いのでしょうか。先日ある高名な分子生物学者にお会いしました時にその方が「人間のいのちは尊い」と言われました。ところが、

その方は、「人間のいのちが物質から出来ていることを研究の結果証明出来た」と言われるのです。それで私は、「なぜ物質で出来ている人間のいのちが尊いのですか、ダイヤモンドと同じ意味で尊いのですか」とお聞きしますと、「そうじゃないなあ、なぜ尊いのかはわからない、なぜかわからないけれど人間のいのちは全宇宙よりも尊い」と言われるのです。そんなおかしなことはありませんね。世界一流の分子生物学者です。その方がなぜかわからないと言われるのです。ただ漠然とそう感じておられるだけなのです。これはお気の毒ですが、この方が神様をご存じないからであります。

なぜ人間のいのちが尊いかと申しますと、それは神様がご自分に似る者として造ってくださった、そのことは聖書に書いてありますが、それだから尊いのであります。ご自分に一番近いものとして造ってくださったからなのです。神様は人間がご自分に応答出来るように、私たちに霊を与えてくださったのです。良心は霊に属するものであります。ほんらい人間というものは神様を認識し神様に応答出来るものとして造られたのに、我々はそうしていないですね。神様をどこかへやってしまって自分を神様にして生きている、自分の思いを中心にして生きています。自分が正しいと思っています。他人に対して、あの人が憎いとか、あの人がうらやましい、などと人を憎んだり妬んだりするのは、自分と比較し

て自分を中心にして考えるからです。人間は一人残らず皆そうです。私もそうです。ここで言う罪は法律上の罪とは違います。法律上の罪はCRIMEと申しますね。しかし、神様に背いた罪はSINであります。最初の人間アダムとエバが神様に背いて以来その子孫であるすべての人間の中に罪という病気が入ってしまったのです。遺伝病と申しましたのはこのことです。この病気の症状は、自分中心ということであります。

普通、皆様方のお考えになる罪は法律上の罪、人殺しとか盗みとかそういうのが罪だとお思いでしょう。ですから罪と言われると、「とんでもない、私は罪など犯したことはない」とおっしゃるでしょう。けれどもそのような罪も結局は先ほど申しましたような、憎しみ、妬みなどという自己中心な思いから出ているに過ぎません。ですから、CRIMEの水源はSINです。神様を無視して人間が自分中心に生きるのがSINという罪なのですから、誰一人として私は絶対に自分中心に生きたことはないと言えない以上、皆が罪を持っていることになるわけです。

「そんな、憎しみや妬みなどというものは皆持っているから大したことはないじゃないですか」とおっしゃるかも知れませんが、神様にとっては正しいものは正しい、正しくないものは正しくないのです。神様は完全な方ですから、少しでも罪があればそれを見過ご

すことはお出来になりません。ですからSINという罪、病気といってもよろしいのですが、これにかかったら死ななければなりません。その死というのは単なる肉体の死ではないのです。SINという病気の結果は永遠の滅び、永遠の苦しみであると聖書に書いてあります。これが怖いのです。皆さん死ぬ時に大変恐れを感じるのは、自分の中の良心がそれをささやくからであります。

健康というのは病気でない状態を言いますが、ほんとうの健康とは今私がお話ししたことでおわかりと思いますが、神様と私たちが正しい関係を回復した状態、これがほんとうの健康であります。ただ体や心が病気でないという状態を指すのではなくて、罪という病気が私たちの中から取り去られた時、私たちはほんとうに健康になります。そしてこれは医者には出来ないことなのです。医学では手が出ないのです。

ではいったい、どんな方法でこの罪という病気を取り除くことが出来るのでしょうか。皆様も知っておられると思いますが、加持祈祷（かじきとう）というのがありますね、神仏を拝む。ところがそんなことではだめなのです。人間が作り出した神や仏をいくら拝んでも無駄です。宗教ではだめです。なぜなら宗教はみな人間が考え出したものだからであります。あるいは良心の痛みを感じますと一生懸命にいろいろな善行に励む、そして「自分で良いことを

したから赦されるだろう」と思うでしょう。でもだめなのです。ONEという罪はそんなことではなくなりません。なぜかというと、自分の心の中に良いことをしたという思いがおこる、これは自分を誇る高慢の罪です。やはり自分中心です。「それじゃ、どうしようもないじゃありませんか。いったいどうしたらいいのですか。滝にでも打たれましょうか」とおっしゃるかも知れません。でもそんなことをしてもだめなのです。

解決の方法がたった一つあります。私たちを造ってくださった神様だけがこの罪という病気を治療してくださる唯一の方なのです。人間が考え出した八百万（やおよろず）の神々ではありません。まことの神様は全知全能の創造主唯お一人です。この神様は私たちの目には見えませんね。けれどもこの美しい軽井沢の自然は人間が造れるものではありません。私たちが素直な心になって自然を見た時に、神様がお造りになったことがわかります。小さな名も知れないような花が誰も見る人もいないようなところで咲いているのを見る時にも、ああこれは神様がお造りになったのだ、と素直に思うことが出来ます。どんな小さな花や草一つでさえも人間が造り出すことは出来ないのです。

私たちの体も大変複雑に出来ておりまして、調べれば調べるほど驚異です。そういう私たち人間は、単なる一学説にしか過ぎない進化論で説明出来るようなものではありません。

人間は猿から進歩したなどというものではありません。神様の造形の極致なのです。宇宙を見てもそうです。宇宙飛行士が宇宙へ飛び出して行って地球を見た時に、驚嘆しました。誰がいったいこんな素晴らしいものを造ったのかと。宇宙と言いましても、私たちの見ている宇宙は全宇宙のほんの一部にしか過ぎません。私たちは宇宙の果てまで行ったことがありません。いくらロケットを飛ばしてもそれは有限なところまでしか行かれません。私たちの住んでいる地球は太陽系のひとつの惑星にしか過ぎません。たくさんの太陽系が銀河系を構成していてその銀河系がかぞえきれないほどあります。それらのものが全く秩序正しく動いている。そのようなものをいったい誰が造り、また動かすことが出来るでしょうか。神様にしか出来ません。そのような神様が小さな虫から私たちまで造ってくださったのです。神様は永遠に存在される方で、「私はアルファでありオメガである」とおっしゃっています。始めであり終わりである全能者、造り主である神様以外に私たちのどうしても取り除けない罪を取り去ってくださる方はないのであります。

　ではどうやって取り除いてくださるのでしょうか。実はもう既に取り除いてくださったのです。それも大変驚くべき方法によってなのです。それは私たちの死に至る恐ろしい罪をご自分の身に負って身代わりになって死んでくださるという方法によって取り除いてく

ださったのです。それがイエス・キリストの十字架なのです。「何だ、二千年も前のユダヤの出来事じゃないか」とおっしゃるかもしれません。けれども全宇宙をお造りになった神様にとって日本も外国もありません。人間はどこの国でも変わりないのです。

イエス様は約二千年前に歴史上目に見える姿でこの世に来てくださった神様なのです。宇宙をお造りになる前から存在された子なる神であり、すべての物を父なる神の御心に従ってご自分でお造りになったのです。もちろん、私たち人間もです。このことは聖書にはっきりと書いてあります。その神様が背いた私たちの罪をご自分の身に負って始末してくださるために、十字架にかかって身代わりの死を遂げ、三日目によみがえって、信じる者に罪の赦しと永遠のいのちを与えてくださっているのです。

聖書でイエス様はいろいろな教えを説いていらっしゃいますが、イエス様がこの世においでになった最も大きな理由は、私たちの罪を十字架の上で始末してくださるためだったのです。このことを信じないで、ただイエス様の教えだけに目をとめても罪は赦されません。よく教会に行っても、十字架のことがわからない、ほんとうに罪が赦されているということを受け入れることが出来ないとおっしゃる方があります。けれども、聖書を神様からの言葉として自分でよくお読みになれば、この十字架の救いがどんなに素晴らしいこと

であるかおわりになるはずです。ご自分の中にある罪の性質を認めて、イエス様の十字架による罪の赦しを感謝して受け入れるならば、その時からあなたは罪という永遠の滅びに至る病から解き放たれ、この世のいのちが終ってからは天国で永遠に生きる者となることが出来るのです。これが、聖書による神様の約束であります。人間の約束ならば破られることもあるかも知れません。けれども神様の約束は絶対に破られることはないのです。

このようにして、霊的健康が与えられますと、たとえ癌になって余命いくばくもない状態になっても、まだイエス様の救いを受け入れない霊的な病気の人に比べて、非常に平安があります。私の知人や友人のキリスト者で、はっきり末期癌であると知らされても、考えられないような安らかな心で恐怖も不安もなくこの世の生活を送り、痛みの中にあってさえも心に平安を持ち、その上まわりの人々に多くの励ましさえ与えて、天に召されて行った方々が何人もあります。医者や看護婦たちも驚くほどでありました。私自身もいつ死んでも少しも恐れません。なぜなら、イエス・キリストによって罪が赦されている、罪という永遠の滅びに至る病気から解放されていると確信している私は、この世を去った時に必ず天国に行くことが出来ることをも確信しているからです。

聖書から少しお読みいたします。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネの福音書5・24）

これはイエス様がおっしゃった言葉ですが、神様を信じた者はこの世に生きている時からすでに永遠のいのちを持っている、死からいのちに移っている、とあります。大変素晴らしい神様の約束です。

今日はいろいろな病気についてお話いたしましたけれども、いちばん怖いのは罪という病気であること、この罪という病気をイエス様を信じて取り去っていただき、どんなことがあっても恐れずに、平安な気持ちで喜んでこの世を生きて行っていただきたいと思います。そして、ご家族の皆様が救われて、子どもの教育とか家庭の内外の問題などいろいろな思い煩いからも解き放たれて、ほんとうの意味での健康な状態になってお過ごしいただきたいと心からお祈りする次第です。

罪（SIN）から神の子（SON）へ

人がもし、ほかの人に対して罪を犯すと、神がその仲裁をしてくださる。だが、人が主に対して罪を犯したら、だれが、その者のために仲裁に立とうか。

（サムエル記第一2・25）

今お読みしましたところが今日のテーマです。罪の問題が中心であることはもうご承知の通りであります。今日初めておいでになった方々、そして初めて聖書をお読みになる方々が一番最初につまずくといいますか、引掛かるのはこの罪という言葉であると思います。繰返し聖書の中に罪のこと、あるいはお前は罪人であるということが語られておりますが、その度に私のどこがいったい悪いのだ、という反発が心の中で起こって来ると思うのです。当然だと思います。世間一般には、罪というのは殺したり、盗んだり、だましたり、というように人に損害を与えることだと考えられています。したがって、自分は人に

そんな迷惑や損害をかけていない、とお思いになるのが当然であります。このような、人に対する罪が、我々の普通考える罪であります。ところが、「そういう悪いことはしないでしょう、しかし一歩下がって、あなたは人に嘘をついたり、悪口をいったり、怒ったり、人を馬鹿にしたり、人を憎んだりしたことはありませんか」と問いかけますと、それもしたことがないという方は、恐らく一人もおられないのではないかと思うのです。それでも、「人には迷惑はかけないからいいじゃないか、自分の心の中でたとえ他人を馬鹿にしても、軽蔑しても、そんなことは罪であってもほんの軽い罪だから、当然許されるべきである、皆やっていることだ」とおっしゃるでしょう。そのように、世の中では罪には重い軽いの差がある、そして一つ一つの罪は分類出来る、と考えられております。罪を仕分けすることが出来る、ある罪は赦されるし、ある罪は赦されない、と世間一般では考えるわけです。

ところが聖書の言う罪は、それと全く違うのです。たとえある人が先ほどのような罪は犯していない、と言ったとしても「あなたはすべての罪を犯した」と聖書は言っています。あなたは人殺しであり、強盗であると言うのです。聖書を見ますと、人は一人残らず人殺しであると言っています。したがって、今ここに立っている私も人を殺しました、強盗もしました、姦淫の罪も犯しました、ということであります。もしここから出て行って、駅

前で大声でそう言ったならば、恐らく私は気違い扱いされて、精神病院に入れられてしまうのではないかと思います。しかしまさに聖書ではすべての人、私に限らずここにおられるすべての方々が人殺しをし、強盗をし、姦淫の罪を犯し、詐欺罪も犯したと指摘しているのです。

マタイの福音書5章21、22節をご覧いただきますと、

「人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって「能なし。」と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、「ばか者。」と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

（マタイの福音書5・21～22）

と書いてあります。兄弟というのは、ここでは他人ととっていただいて結構だと思いますが、私たちはよく能なしとか、ばか者とかいって口には出しませんけれど心の中で罵ることがあります。経験がおありになる方が多いと思いますが、そういう者は最高議会、今でいう裁判所ですが、そこに引き渡される、あるいは燃えるゲヘナ、これは地獄のことで

すが、その永遠の滅びに投げこまれるとイエス様は言っておられます。同じような箇所がヨハネの手紙第一３章15節にもあります。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。

（ヨハネの手紙第一３・15）

人を憎めばその人を殺したと同じであるということですね。ギリシャの哲学者でソクラテスという人がいます。どなたもご存知と思います。よく倫理の本に出てきますが、この人に奥さんがいました。ところがこの奥さんは大変な悪妻でありまして、世界三大悪妻の一人ということであります（笑い声）。彼女に卒業すればすべての女性に卒業し得るとある人が言ったそうです。その彼女がソクラテスをある時大声で罵ったあげく、頭に水をぶっかけたそうであります。その時ソクラテスはどう言ったか、有名な言葉だそうですが「雷の後に夕立が来るのは当り前のことである」（笑い声）。これは大変なことでありますが、いったいソクラテスの心の中はどんなだったか、ほんとうに悠然とその奥さんに対して何らの憎しみも持たないでいられたのだろうかと、私はちょっと疑ってしまうのですね。やはりソクラテスも人でありますから、他人の手前、格好いいことを言って見せたのではないかと思うのです。けれども恐らく心の中では「この女！」と憎しみの思いを持ったの

ではないでしょうか。そうなると、ソクラテスも人殺しをしたわけです。

結局、憎しみというのは殺人の卵である、ということが出来るのです。法律では殺人というものは罰しても、憎悪というものは罰しません。けれども神様の前には両者は全く同罪であります。なぜならば、それらは同じ水源から流れ出た水だからであります。さらに聖書は、私たちは皆人殺しをしただけではなく、先ほど言いましたように人殺しをした人は強盗もしたし、姦淫もした、あるいはその他の罪を犯したと言っております。ヤコブの手紙2章10節、11節をお開きいただきたいと思いますが、

律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。なぜなら、「姦淫してはならない。」と言われた方は、「殺してはならない。」ともいわれたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。

（ヤコブの手紙2・10～11）

とここでも言われております。律法というのは神様が私たちにくださった戒めでありますが、一つの点でも守らなければ律法全体を犯したことになる。つまり神様の戒めを破ったことになるわけです。同じ罪の木である以上、それが人殺しという実を結んだなら強盗

の実も結ぶでしょうし、姦淫の実も結ぶでしょう、次々と罪の実を結ぶ性質があるからです。したがって、聖書の言う罪とは人殺し、強盗というようなあの罪、この罪というようなものではなく、神様に対する私たちの誤った心の態度なのであります。

つまり私たちの罪は、神様ぬきの世界で自分自身が思い通りに生きる、生活設計を自分で立てて行く、そういう道を選んだことにあります。そのことを聖書の中で示しているのが、ご承知のアダムとエバのところであります。創世記3章1節から23節あたりに詳しく書かれております。今日は時間の関係でお読みいたしませんけれども、ここでアダムとエバは神様から、「これだけは食べてはいけない」と命令を受けたにも拘らず、その命令に逆らって自分の欲に従って、禁断の木の実を取って食べてしまいました。自分の思いに従った、自分の欲に従った、これが罪であります。ここでちょっと英語の勉強をしたいと思います。罪のことを英語でSINと言います。この単語を見ていただきますと、三つの文字の真中にIという字があります。これはI、つまり私、自分、自己のことですね。面白いなと思いましたのは、罪（SIN）というのは私、つまりIを真中に置いている。この自己中心が罪なのだということをこの単語が示していることです。

ローマ人への手紙3章23節に、

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、

（ローマ人への手紙3・23）

と書かれておりますが、先ほどから申しましたように、私たちはすべて一人残らず罪を犯しております。したがって神様から栄誉を受けることは出来ません。ローマ人への手紙の3章9節から18節までをお読みいたしますと、

私たちは前に、ユダヤ人もギリシャ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもいない。」「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり」「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「彼らの足は、血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

（ローマ人への手紙3・9～18）

と書いてあります。「義人はいない。ひとりもいない。」有名なみことばであります。義

人というのは神様から義とされた人であります。法律的に言いますと、これは無罪判決を受けた人という意味だそうですけれども、聖書では神様の前に正しいとされる人、罪なき者と呼ばれる資格のある人、これが義人であります。それから「善を行う人はいない。ひとりもいない」と書かれておりますが、この善というのは何か人に良いことをしてあげるというようなことではなくて、道徳的に完全であるという意味で、これは神の属性であります。このように見て来ますと、人間は決して善であり得ません。人間である以上、善を行うことの出来る人など一人もいないわけです。すべて罪人であるということであります。

そこで次に起こって来る問題は、どうしたら私たちはその罪を取り除くことが出来るか、ということであります。そのためには修養を積むと言いますか、自己を高める、あるいは努力することによって、この罪、自己中心、自分の欲というものを捨てようと試みる、これが多くの方の考えられることです。けれども、それをしていったい罪から逃れることが出来るでしょうか。ルカの福音書18章をちょっと開いていただきたいのですが、ここには「一生懸命に神様の戒めを守るという行いによって神様の前に自分たちは正しいと見られるのだ」と考えていたパリサイ人というユダヤ人の一派の人のことが書かれています。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこ

のようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』」

（ルカの福音書18・9～11）

ここでパリサイ人はもう既に罪を犯しているわけです。どんな罪かといいますと、ここに書いてありますように他の人を見下したという罪です。すなわち高慢の罪です。高ぶりの罪、自分を誇る罪で、この罪は一番したたかな罪です。私たちがいろいろな罪から逃れようとした時に、最後に残るのがこのごう慢の罪なんですね。真面目に罪と戦えば戦うほど、私たちはこのごう慢の罪を犯していることを認めざるを得なくなります。ローマ人への手紙にもう一度戻りまして、3章20節に、

律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

（ローマ人への手紙3・20）

と書かれている通りに、神様の戒めを守ろうとすればするほど、その人に罪の意識が生

じるというのは、今申しました自分を誇る罪、ごう慢の罪が残ってしまう。そしてそれを取り除くことは至難の業だからであります。

では罪から逃れるために、何の方法もないのでしょうか。いいえ、非常に有効な方法があるのです。それは神に帰ることであります。先ほどからいろいろと罪について考えてまいりましたが、そもそも創造主である神から離れて、神中心でなく自分中心に生きて来たこと、人間がすべての中心となって生きて来たこと、これこそが罪の本質なのですから、我々が神のもとに帰ることが出来れば、その時こそ完全に罪から離脱することが出来るわけです。

しかし、いったいどうしたら神に帰ることが出来るのでしょうか。私たちが神から離れたのは自分が自分の主人になろう、自分の思いに従って生きよう、つまり自分を神として生きようというごう慢な心を起こした結果ですから、そのごう慢さが砕かれない限りは神に帰ることは出来ないのであります。そこで、有名な放蕩息子のたとえ話をルカの福音書15章から見てみたいのです。

このたとえ話は父なる神様と人間の関係を、イエス様が父親と息子のたとえから示してくださっている箇所です。二人の息子がおりますが、ここではそのうちの弟のほうに焦点

を当ててみたいと思います。この弟は放蕩息子でありまして、父親から貰った財産を湯水のように使って、自分の欲望を満たしていました。ところが、その財産も使い果したころ、大飢饉が起こって食べる物にも大変な苦労をし、ついには豚の餌さえも貰えないような惨めな有様になってしまいました。しかし、その苦しみの中で彼は我に返ったのです。父親のところに帰って謝ろうと思ったのです。そして父親のところへ帰り「お父さん、私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました」と悔い砕かれた心で詫びた時に、父親は「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかった」と大喜びで抱きしめたというたとえ話です。

このたとえを通してわれわれは罪について、また罪を赦されるためにはどうしたらよいかということについて、大いに示されるところがあります。15章11節から13節は、父なる神のもとから遠く離れて勝手放題のことをしている、自分中心の生活をしている人間に当てはまります。多くの人たちがこういう生活をしており、それに対して神様がどんなに悲しんでいらっしゃるかと言うことには全く無頓着、無感覚で、自分の欲望に従って生活しているのであります。14節から16節になりますと、大飢饉が起ります。これはそのような人たちに対して、目覚ましの作用をするものです。ここでようやく彼も困り始めます。そ

こで彼は何をしたかと言いますと、何とか人に頼って生きて行こうとするわけです。これは私たちがこの世の人や物に頼って生きようとするのに似ています。ところが彼は身を寄せた先で豚の世話をさせられるのですが、空腹でどうしようもないのに、豚の餌さえ貰えなかったのです。この空腹と言うのは、肉体的な空腹感だけではなく、心の空しさ、焦りを示しているのではないでしょうか。このように頼るものを全部なくした時、彼は父親のことを思い出します。そして自分が父親に罪を犯していたことに目覚め、父親のもとに帰り、心から詫びるのです。17節から24節までにそれが書かれています。ここで大切なことは、神様に帰る唯一の道は、自分の現状が、豚と同じかそれ以下であるということに気が付くことではないかと思います。全く自分では何も出来ない、自分は全く愚かである、そういう自分に気が付くことであると思います。そうなった時に、自分、自分、という自己中心でごう慢な思いが砕かれて、悔い改めて父なる神のもとに帰る備えが出来るのです。

ヨハネの手紙第一1章9節に、

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（ヨハネの手紙第一1・9）

とあります。これは神様の約束であります。神様は絶対に正しくそして真実な方ですから、神様が約束を破られることは決してありません。すべての悪から清めてくださり、すべての罪を赦してくださる。そこには全く何の制限もないのです。どのような内容の罪であっても、どのような悪質な罪であっても、そんなことは問題ではありません。神様は私たちが心から罪を悔い改めれば、必ず赦してくださるのです。

つぎに起こってくる問題は、ではどんな方法で神様は私たちの罪を赦してくださるのだろうか、ということであります。これにはたった一つの方法が聖書によって示されております。罪を犯したことのないただ一人の人であって神であるイエス・キリストの十字架の死によって、イエス様の流された血潮によって、私たちの罪が清められるということであります。ヨハネの手紙第一1章7節の後半に、

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（ヨハネの手紙第一1・7）

と書いてあります。罪の全くない、神の子であるイエス様、私たちの罪の身代わりとなって十字架に付くためにこの世に人間の姿をとって来てくださったイエス様の清い血潮のみが、私たちの罪、自分自身ではどんなことをしても取り除くことの出来ない罪を取り

去り、清める力なのであります。ペテロの手紙第一2章22節から24節、これも有名なところですが、

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

（ペテロの手紙第一2・22～24）

このみことばの通りであります。また癒される、というのは創り主なる神様から離れて死んだようになっている私たちの霊を、イエス様ご自身が打たれ、釘付けられ、槍で刺し通されて、流されたその血潮によって、生かしてくださり、父なる神様との正しい関係に戻してくださった、ということであります。この事実を信じ、へりくだって、ほんとうに自分の罪を認め、悔い改める時に、私たちはイエス様の十字架の贖いのゆえに、神様の前に全く罪赦されて立つことが出来るようになるのであります。これだけが罪から解放されて、全き自由の身となるただ一つの方法であります。

ではこのようにして神の前に義とされたのは、その時だけなのだろうか、一過性なのだろうか、と言いますと、そうではなく、この罪の赦しというのは、私たちの罪を永久に赦してくださる、私たちは永久に義人とされるということなのであります。先ほどの私たち人間のSINという罪、自己中心の罪、これをイエス様は十字架の上で取り除いて無いものとしてくださいました。ですから、SINの真中にあったI、つまり自己中心という罪が無くなった、0つまりゼロになったわけです。するとどうなるでしょうか。SONになりました。英語でSONとは息子という意味ですね。誰の息子でしょうか。神様の息子です。イエス様は私たちのSINつまり罪を、十字架の上で身代わりに負ってくださって、私たちを神の子どもSONにしてくださったのです。いったん子どもとなった者はもとに戻ることがない、不可逆反応であります。神様の約束でありますから、いったんゼロにされたものはもう変わることがありません。神の子とされた者は永遠に神の子であります。

最初にお読みいたしましたみことばに「人が主に対して罪を犯したら、だれが、その者のために仲裁に立とうか」という問いがありましたが、答えはもうおわかりのように、イエス・キリストなのであります。イエス・キリスト以外に神と人との間の仲介者はありません。イエス・キリストの義によって、私たちの罪が覆われている。であるからこそ、私

たちは義人として恐れることなく、はばかることなく、神様の前に出ることが出来るわけです。その時、神様はもう私たちの罪を思い出さない、といっておられます。これも大変有名なみことばでありますが、ヘブル人への手紙10章17節で、

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。

（ヘブル人への手紙10・17）

と神様が約束されているのです。これは神様がクリスチャンを覆っているキリストの義を見ておられるからであります。キリストはこのようにしてキリスト者を聖なる者としてくださった、ご自身が十字架にかかってこのことを永遠に全うしてくださったのであります。

私はクリスチャンです、と言っている人たちのなかに、イエス様を信じたと言いながら、自分はまだ罪の中にいるのではないか、あるいは自分は天国に入れるかどうかわからない、と言っている人がたくさんおられます。実は、私も数年前まではそんなことは神様が決めてくださることで、私にはわからないなどと公言していたような罪深い者でありました。けれどもそのようなことを言うのは、神様の言葉、約束を疑うことになるわけです。ヨハネの福音書19章30節に、十字架にかかられた時のイエス様のみことばがあります。

イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した。」と言われた。そして頭をたれて、霊をお渡しになった。

（ヨハネの福音書19・30）

「完了した」とは何を完了したのでしょうか。それは、イエス様の十字架による贖いの御業によって、私たちの罪の赦しが完了した、過去の罪だけでなく未来に犯すであろう罪も、すべての罪の赦しがイエス様の十字架の御業によって完了した、という意味であります。このイエス様の十字架の犠牲はただ一度限りで永遠に有効なのであります。ですから、すべての罪はこの場所で完全に始末されたのです。罪は一つ残らずここで処理されました。ローマ人への手紙6章11節で、

このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。

（ローマ人への手紙6・11）

と書かれているのは、それを指しているわけであります。

つぎに、使徒の働き10章15節を開いていただきたいのですが、ここでは神様が、

神がきよめたものを、きよくないと言ってはならない。

（使徒の働き10・15）

とはっきりおっしゃっています。私たちはイエス・キリストの十字架によって神様に清められている、と神様がおっしゃっているにも拘らず、いいえ、私にはまだ罪が残っていますから清くありません、と言ったとしたらどうなるでしょうか。これは神様のおっしゃったことを無視して、自分自身の考えを主張していることであり、これこそが罪なのであります。ですから、イエス様を信じ受け入れた私たちキリスト者は、SIN をSON にしてくださったこの神様の恵みに感謝こそすれ、一点も疑ってはならないのであります。

ヨハネの手紙第一5章1節をお開きいただきたいのですが、

イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生れたのです。

そして18節に、

神によって生れた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。神から生れた方が彼を守っていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。

（ヨハネの手紙第一5・1、18）

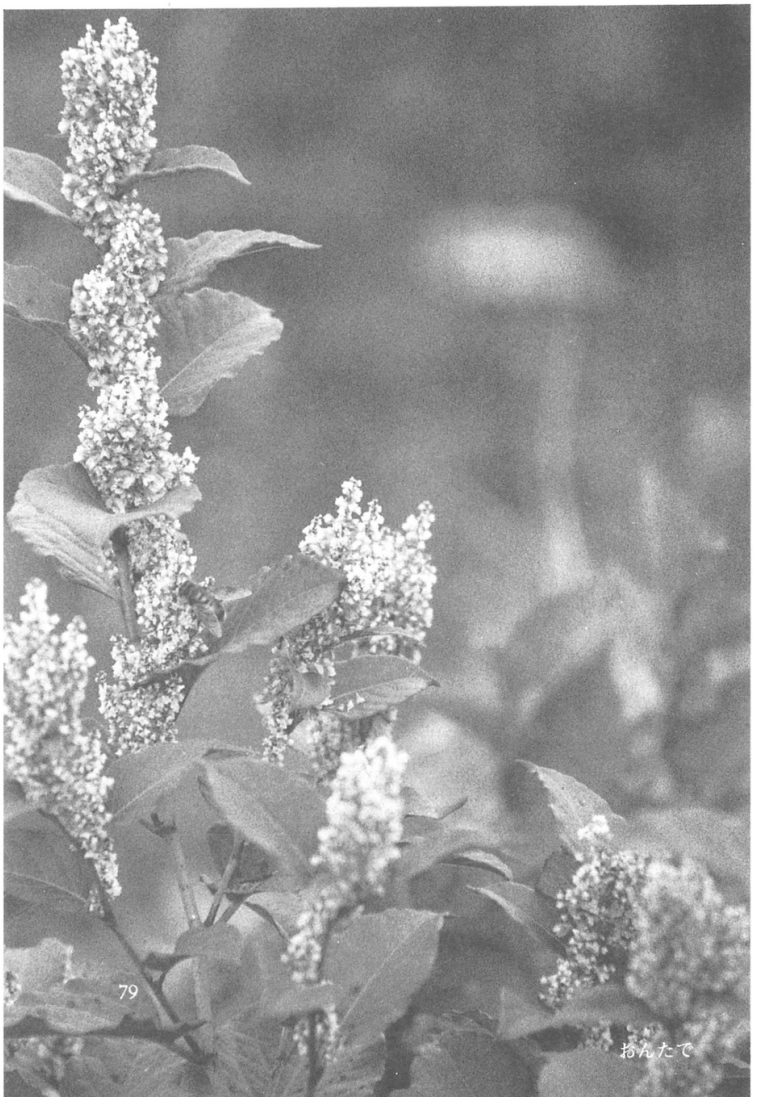
神から生れた方、すなわちイエス様が私たちを守ってくださるから、悪魔さえ私たちに

触れることが出来ないということを、ここにはっきりとヨハネを通して神様が約束してくださっているのです。同じく、ヨハネの手紙第一３章９節には、

だれでも神から生れた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生れたので、罪のうちを歩むことができないのです。

（ヨハネの手紙第一３・９）

とあります。これらの聖書のことば、すなわち神の言葉を通して、私たちはいったん神の子とされたならば、全く罪から解放されていることを知るのです。罪から解放されていれば、私たちはこの世のいのちが終わった時、ただちに天国に行くことが出来るのです。そのような素晴らしい恵み、素晴らしい約束を私たちはいただいているのですからどうかまだ神様をご存じない方は、素直に神様のこの約束を信じて、一日も早くSINからSONへ、罪から解放されて神の子になっていただきたいと思います。



あなたの誇りは何か

ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

（詩篇20・7）

今日ご一緒に考えたいのは、人の誇りについてです。引用された聖句を見ますと、そこには二つのグループの人たちがいます。一つは、いくさ車、すなわち戦車や馬を誇る、今で言えば車かもしれませんけれども、そういった自分の持ち物を誇っている。それからもう一つのグループは、主なる神様を誇っている。こういう二つのグループです。そして、私たちはこの二つのどちらかに属しているわけです。どちらにも属さないと言うことはありません。人間である以上このどちらかに属するはずです。ではいったい私たちは、このどちらに属しているか、またどちらが本当に属するべきものなのか、というのが今日の課

題です。

まず、戦車や馬を誇るというのはどういうことなのでしょうか。これは言い替えますと、自分の力を誇示するということなのです。自分の力を、自分の持っている物を誇るということです。旧約の時代から、強力な戦車、あるいはすばらしい馬を持つということは、強さの象徴でありました。こういう物を持っている人は、他人を制覇することが出来る、治めることが出来る、また支配することが出来るというわけです。これは現代でも同じで、いろいろな国がその強さを誇る時に、いったい何を誇るかと言えば、軍事力、経済力、あるいは工業力、科学力などを競っています。そしてそのようなものをたくさん持っている国、そういった面で優秀な国が、強国、一流国とされています。たとえば、ミサイルの数とか、核兵器の数などに代表されるようなものです。また、エネルギーについて言えば、かつては石油埋蔵量を誇っていたのが、いまや核のエネルギーをたくさん持っているほど大国であり、強国であると考えられるようになって来ました。

しかし、そういった人間の誇りとするものがどういう結果をもたらすか、ということがまた大変問題なのです。ちょっと話がそれますけれども、例のチェルノブイリと言うソ連の原子力発電所の事故が最近大変大きな問題を起こしました。このチェルノブリイとは、

すでにいろいろ新聞などの情報でご存知かと思いますが、ロシヤ語で「苦よもぎ」という意味だそうで、この言葉はヨハネの黙示録に記されています。8章10節、11節に、イエス様がこの世を裁くために再びおいでになる時、ご自分のお造りになった世を一度破壊されて新しい天地をお造りになるのですが、その時の大変恐ろしい情景が象徴的に書かれております。お読みいたしますと、

第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

（ヨハネの黙示録8・10～11）

と書かれています。聖書によれば、この苦よもぎと言う星が川や水源に落ち、水が汚染されてたくさんの人が死んだとされていますが、現代の苦よもぎは原子力発電所でありました。苦よもぎと呼ばれる原子力発電所がソ連にあったというのを、私たちは新聞で知ったわけですけれども、これは非常な驚きであり、しかも聖書の預言通りに多くの人を殺しました。これからも、この事故によって多くの人々が大きな影響を受けるでしょう。これ

は、人間が作ったもの、あるいは人間が誇りとしているものが、自分たちにどういう作用をもたらすかということの一つの象徴的な例ではないかと思います。

国家間ではそういうことがありますけれども、人間一人一人が個人として考えた時にも、似たような誇りをそれぞれの人が持っていると思います。戦車でなくて車でもいろいろなグレードのものがありますが、立派な、高価な車に乗るというのは、やはりその人が自分の力を誇示している場合が多いでしょう。また、学歴にしてもそうですし、学閥を作っているなどというのも、個人を含めた集団の誇りになるわけです。社会的地位は言うまでもありません。財力もそうです。金が無くても体力がある、というような誇りを持っている人もいます。また、「自分は貧乏でも血統がいい」と言って血筋を誇っている人や、家柄を誇りにしている人もあります。家柄というのは血筋に入るかもしれませんが、おもしろいもので、貴族の家柄をお金で買うなどということが外国でよくあります。お金で買ってでもそれがプライドになるのですね。また、ある人は、「自分は一生懸命に人のために尽くしてきた、自分のことを二の次にして気の毒な人達のために尽くしてきた」という人もあるでしょう。大変へりくだっていて立派な人だと思いますが、やはりその人の心のどこかに自分の行いを誇るところがあるのではないでしょうか。自己満足という思いですね。

そのほかにも、意志が強いとか、知識をたくさん持っているとか、道徳的に優れているなどという誇りを持っている人もたくさんあります。

人は、このようにいろいろなものを誇りにしています。それは結局、自分はこれだけ他の人より優れている、勝っている、そしてそういうものを持っていることによって自分が満足する、という自己中心的な思いがあって、いろいろなものを自分の身に着けてそれを誇ることになるわけです。

では次に、人間が誇りとするこのようなものは、私たちにいったいどんな保障を与えてくれるのか、ということについて考えてみたいと思います。ここで詩篇33篇16節と17節をお読みいたします。

王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は力の強いことによっては救い出されない。軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。

（詩篇33・16～17）

聖書にはこのようにはっきりと書いてあります。もう一箇所イザヤ書31章1節と3節をお読みいたします。

ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、

非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も、肉であって霊ではない。主が御手を伸ばすと、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れて、みな共に滅び果てる。

（イザヤ31・1、3）

と書いてあります。ここでは旧約の時代のイスラエル人とエジプト人との関係を通して神様が語っておられるのですが、弱小国であるユダヤがまわりの強国の間にはさまって大変苦しんでいるわけです。アッシリアとかエジプトとか大きな強い国がまわりにあるのですが、アッシリアに攻められて、エジプトに助けを求める。エジプトに頼る理由は、エジプトが多数の戦車と非常に強い騎兵隊を持っているからです。ところが、ほんとうにイスラエルを助ける方は主なる神様です。けれども、イスラエルはそのことをすっかり忘れて、軍勢に、馬に、戦車に助けを求めるのです。3節にありますように神様は、「エジプトに頼っても無駄である、自分が手を伸ばせば、助けるエジプト人も助けられるイスラエル人も、共に滅び果ててしまうのだ」と言っておられるのです。

もう一箇所詩篇49篇16節から20節をお読みします。

恐れるな。人が富を得ても、その人の家の栄誉が増し加わっても。人は、死ぬとき、何一つ持って行くことができず、その栄誉も彼に従って下っては行かないのだ。彼が生きている間、自分を祝福できても、また、あなたが幸いな暮らしをしているために、人々があなたをほめたたえても。あなたは、自分の先祖の世代に行き、彼らは決して光を見ないであろう。人はその栄華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい。

（詩篇49・16～20）

「悟りがなければ」とは「神様がどういう方か正しく認識していなければ」という意味と考えてよいと思います。私たちが誇るもの、富や栄誉をいくら持っていてもそれは生きているほんの僅かな、何年かわかりませんが、それこそ長くて人生八十年位の、永遠から見ればほんの僅かな間の単なる自己満足に過ぎない。人がこの世でどんな栄華の中にあっても、神様を知る真の知恵がなければ、結局は滅びうせる獣と同じであると言うのです。

そして聖書は、このようにして考えてまいりました人の誇りというものは罪である、と言っているのです。聖書は、誇ることは、誇り高ぶることを意味する、と言っています。誇るということは、自慢をする、得意になるということで、この高慢の罪について、詩篇

5篇5節に、「誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません」と書かれています。御目の前とは神様の前ということです。神の前に立つことの出来る者は、神様に正しいと認められている者だけです。人間が自分の力、知恵、あるいはもろもろの持てるものに頼る時、必ず誇り高ぶりが伴います。これは、「自分が……」、「自分の……」という自分中心の姿であります。造り主であられる神を無視した人間の自己中心的な心は、罪の中でも神様の最も嫌われる罪であります。

このような誇り高ぶる人間を神様は裁かれます。ローマ人への手紙6章23節に記されておりますように、「罪の報酬は死」であります。この死というのは肉体の死の後に来る永遠の滅びを意味します。このように、私たちの誇り高ぶりの結果は滅びなのであります。これが私たちの将来に待っているものであり、それに向って私たちはただ目先のものを誇りながら、突き進んでいるのです。誇り高ぶりながら、滅びに向かって歩み続けているわけであります。これが、軍馬を誇り、戦車を誇る人生の姿であります。

けれども、そのことを知って、いくら自分の誇るものによって自分を滅びから救い出そうと努力してもそれは不可能です。なぜかと言うと、罪の原因である自分の誇りで自分の罪の代価を支払うということは、全く理屈にも合わないことだからです。罪そのものであ

る誇りをいくら神様の前に積み上げても、罪で罪を買い取ることは出来ません。

では、すでに神様を知っている人たちは一人残らず神様を自分の誇りにしているかというと、そうではないと聖書に書いてあります。神様を知っているのに神様を誇らないで自分を誇るというよい例がユダヤ人です。神様が創造主であり全能者であることを、ユダヤ人は彼らの先祖であるアブラハム以来ずっと神様ご自身から知らされて来ているにも拘わらず、彼らは神様を誇るのではなく自分たちを誇って来た。どのように誇ったかというと、自分たちは神の選民である、神に選ばれた民族であるということを誇りました。自分たちは神様から特別に掟（おきて）、つまり十戒という律法を与えられている、そしてそれを守っている、ということを彼らは誇ったのです。守るといっても、実は自分たちの都合の良いように形式を変えてそれを守っていたのです。そういった神様の望まれないような方式で守っていたにも拘わらず、彼らは自分たちが神様から律法を与えられている、そしてそれを守っている、ということをまわりの人たちに誇示することによって自ら誇り高ぶっていたわけです。

そのように神様を知っていながら、自分たちを誇ったユダヤ人は神様に罰せられます。エレミヤ書9章23節から26節で神様は次のようにおっしゃっています。

知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。見よ。その日が来る。――主の御告げ。――その日、わたしは、すべて包皮に割礼を受けている者を罰する。イスラエルの全家も心に割礼を受けていないからだ。

（エレミヤ書9・23～26）

その日というのは神の裁きの日です。神様がやがてこの世を裁くために、イエス様を再びこの世に遣わされる日であります。イエス・キリストのご再臨がその日ですが、その日に神様は「包皮に割礼を受けている者」、つまり体の一部分を傷付けたから律法を守っているのだというような形式的な従いかたをして、それで良しとしているユダヤ人たちを罰するといわれるのです。なぜかというと、神から選ばれた民でありながら心から神に従っていない、つまり心に割礼を受けていないからであります。大変よく知られている箇所なので何回も引用しますが、ルカの福音書18章9節から14節に、このようなユダヤ人の典型的な例であるパリサイ人と、当時罪人扱いされていた取税人のことが記されています。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこ

のようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。」

（ルカの福音書18・9～14）

これはイエス様のおっしゃった言葉です。自称義人、「自分は神の前に義と認められて立つことができる」とおごり高ぶっているのはこのパリサイ人です。「きちんと神様の掟（おきて）は守っています。こんな取税人のような罪人ではありません」というおごり高ぶり、これを神様は一番嫌われます。そして、そういう態度を取るユダヤ人を罰するといわれ、彼らの救いは最後にされました。神様は彼らより先に異邦人、つまりユダヤ人以外の国民の中で神様を信じる者を救おうと決められたのです。

では、一番最初にありました神を知る者、神によって救われた者、イエス・キリストを救い主として受け入れた者は神を誇ることが出来るか、ということについて最後に考えてみたいと思います。コリント人への手紙第一 1章21節から27節と31節にこう書かれております。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシャ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシャ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。

（コリント人への手紙第一 1・21～27、31）

もし人間の知恵によって神様の救いの御業、キリストの十字架や復活の意味というもの

がわかったら、恐らく人間はますます自分を誇り、神の前にごう慢な者になるでしょう。そのことを神様はご存知でパウロを通してここでこのように御心を現していらっしゃるのです。私たちキリスト者も、自分たちが主を信じた時を振り返ってみて、自分たちの知恵や力が必要だっただろうかと考えてみますと、必要だったどころか妨げにしかならなかったことがはっきりわかります。そんなものは何の役にも立たないのですね。自分の誇っていた一切のものは、イエス様を信じる時には全く妨げにしかならないのです。ここに書かれてあります通り、神様は御前でだれをも誇らせないと言っていらっしゃるのです。エペソ人への手紙2章8節と9節に、

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

（エペソ人への手紙2・8～9）

と書かれています。結局、自分自身の力で救われたのではなくて、神様の一方的な恵みによって救われたのですから、だれも誇ることは出来ないわけです。このようにして神様は、私たちがごう慢にならないように配慮してくださっているのです。

私たちが神様のこの恵みを受け入れた時、神様は私たちを子としてくださるという素晴らしい約束があります。エペソ人への手紙1章5節に、

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

（エペソ人への手紙1・5）

とありますように、救われた者にとって神様は父親です。父なる神様は御子イエス・キリストの十字架の贖いのゆえに、罪を悔いて救われた者に永遠のいのちを与え、ご自分の子として扱ってくださるのです。万物の創造主、永遠に存在しておられ、私たち人間をはじめとして被造物をすべて支配しておられる絶対者の神様を、私たちは救われてのちには父と呼ぶことが出来る。そしてそのような父なる神様と私たちは人格的な交わりを持つことが出来る。これは大きな誇りであり特権であります。私たちはその恵みを日々みことばを通してまたいろいろな体験を通して知ることが出来ます。

ここで今、胸に手を当てて、私たちはいったい何を誇っているのだろうかと考える必要があると思います。もし、まだ神の大いなる恵みとあわれみを拒んで自分を誇っているのであれば、そのような空しい誇りは捨てて、先ほどの取税人のようにへりくだって神様の

御前に出れば、神様はただちにご自分の子としてくださり、この唯一の創造主であられるまことの神様を心から誇る者、神の子として永遠に生きる者としてくださるのです。



こおにゆり

ほんとうの自由

そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどうして、『あなたがたは自由になる。』と言われるのですか。」

イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。奴隷はいつまでも家にいるのではありません。しかし、息子はいつまでもいます。ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

（ヨハネの福音書8・31～36）

今日は、ただいまお読みいたしました箇所から、特に36節の「もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」というみことばを中心に、ご一緒にほんとうの自由とは何かということを考えてみたいと思います。

その前に31節から32節にかけてイエス様は、信じたユダヤ人、といってもその言動をみますとほんとうに信じているとは思い難いのですが、その人たちに対して「あなたがたがわたしのことばにとどまるなら、真理はあなたがたを自由にします」とおっしゃっています。この真理とは何かと言いますと、ヨハネの福音書14章6節でイエス様が「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」と言っておられますように、真理はイエス様ご自身のことであります。ですから、イエス様はユダヤ人たちに、「わたしが誰であるかということを知って、わたしを信じるなら、わたしはあなたがたを自由にしましょう」とおっしゃったわけです。これは非常に大切なことをおっしゃっているのです。ところがユダヤ人たちはそのイエス様のおっしゃった大事なことを理解せずに、この「自由にする」という言葉に引掛かってしまったんですね。「自由にする」ということは今は自由でない状態である。そう言われたのはユダヤ人にとって、とても腹立たしいことだったのです。その

ことが33節にあります。「私たちはアブラハムの子孫であって、誰の奴隷にもなったことがない、我々は今でも自由である、それなのになぜあなたは自由になれる、などということを言うのですか」といって彼らはイエス様に反抗したわけです。

ユダヤ人の言ったこの言葉は間違っています。なぜかと言いますと、かつて飢饉のためにエジプトに逃れたユダヤ人達が、そこで長い間過酷な労働を課せられ、大変な苦しみを味わい、神の導きによってエジプトから脱出したことが創世記や出エジプト記に書かれておりますし、また西暦前六百年頃にバビロン帝国と戦って敗れ、王様以下ほとんどの国民が捕虜、捕囚となって七十年間バビロンに連れて行かれたという歴史上の事実があります。それだけではなく、イエス様がおられたこの当時もローマ帝国の支配下にあったわけです。けれども彼らが我々は自由である、誰の奴隷になったこともないと主張するのには、それなりの根拠があったのです。

というのは、ユダヤ人たちは、神様だけが自分たちの統治者であり支配者であると信じておりました。ですから、「私たちはアブラハムの子孫である」と言ったわけです。したがって、当時ローマの属国でありましても彼らは精神の独立は固く守っていた、これも事実だったのであります。それで彼らは、たとえ体は隷属しても精神は決してそうではない

のだ、という意味でイエス様に反発したのであります。

ところが、イエス様が彼らにおっしゃったのは人間や国ではなく、他のものへの隷属のことだったのです。34節に「あなたがたは罪を犯している、罪を行う者はみな罪の奴隷である、あなたは罪に隷属しているではありませんか」とおっしゃったのです。さらにイエス様はユダヤ人に対して「奴隷はいつまでも家にいるのではありません。しかし息子はいつまでもいます」とおっしゃいました。当時、奴隷とその家の息子は非常に厳しく区別されていました。息子はいつまでも家にいることが出来ます。けれども奴隷はいつでも放り出すことが出来たのです。家の主人はいつでも奴隷に出て行けと言うことが出来ました。しかし誰も息子の地位を奪うことは出来ません。息子は息子であります。ですからイエス様はこの意味においてユダヤ人たちに「あなたがたは、アブラハムの子孫、すなわち息子であると思い込んでいる。しかし注意しなさい、あなたがたは自分自身に従うことによって自分を自分の奴隷にしているではないか」とおっしゃったわけです。

では先ほどイエス様がおっしゃった罪とはいったいどんなものでしょうか。神様によって造られた人間が我々を始め万物の創造者である神様に背いて、あるいは無視して、忘れて、自分の欲望に従っている状態、自分の思いを中心にして生きている、そのような状態、

これが罪である、とおっしゃっているわけです。その罪がどんなに恐ろしいかも知らずに人間は生きているのであります。ソクラテスは「人間は快楽というものに支配されているのに、どうして自由であると言えましょう」と言っております。とかく私たちは自分のしたいことをする、したいことが出来る、それが自由であると考えがちでありますけれども、ソクラテスが言っておりますように、まさに快楽の奴隷、自分の欲望の奴隷であり、結局それは罪の奴隷であるに過ぎない状態なのです。

パウロも「あなたがたが罪の奴隷であった時には義に対して自由にふるまっていた、しかしその行きつく先は死であった」とローマ人への手紙6章20節、21節で語っております。パウロはこのことを自分自身についても言っているのでありまして、彼がかつて自分の思いに従って生きていた時には全知全能であり、完全に正しく、聖い方であるがゆえに人間を厳しくさばかれる神様に対して、恐れもなく勝手気ままに、自由にふるまっていた。しかしそのような生き方をする者の行きつくところは死であると神によって示されたのです。この死というのは肉体の死を意味するのではなく、永遠の滅びのことであります。

パウロに限らず今日でも多くの人が自分の欲望の奴隷となって、自分の思うままの生き方をしています。たとえば最近パソコンが非常に普及しております。私の研究室にも六、

七台ありますが、家庭にもパソコンが入りこんでいる。ＩＢＭに勤めておられる兄弟がたも何人かおられて御同慶のいたりですけれども（笑い声）、ただし、そのためにコン中というのが我が国に大変増加しつつあります。コン中というのはコンピューター中毒のことであります（笑い声）。コンピューター依存症という新しい病気でありまして、このコン中にかかるとどうなるかと言いますと、私もコン中さんに何人かお会いして話を聞いておりますが大変なんですね。「コンピューターがないと生きて行けない」と言われます。もうコンピューターだけが生きがいであって、コンピューターと話していると楽しい。それこそ寝ても覚めてもコンピューターなのです。ですから時間の経つのがわからなくなって、夜も昼も無くなってしまう。食事もコンピューターと話をしながら食べるわけです。家族も放ったらかしであります。人間関係が煩わしくなってしまってもう口をきく気もしない、それだけならまだいいのですけれども、「もしコンピューターが無くなったらどうしようと思っただけで不安になってしまう。それが恐ろしくて気が変になりそうだ」というのです。こういう人たちが私の身近にも何人もおりますし、ある病院ではそういう人を集めて治療しております。そうなりますともう家庭も崩壊してしまうのですね。そういう状態が起こっております。

また、知らないうちにコンピューターに管理されている人が増えています。企業の中には社員の業績とか仕事のやりかたをコンピューターでコントロールしている会社がありまして、されている人は知らないかも知れませんが、それを人事管理に使うというようなことが行なわれております。これからもどんどん増えて来ると思います。それからこれはアメリカの話でありますけれども、コンピューターが結婚の司式をするんですね。コンピューターが「お前はこの女（あるいは男）を愛するか」と言いますと、二人が「はい」とコンピューターに答える（笑い声）。コンピューターの前で結婚の誓いをするわけです。これは明らかにコン前結婚であります（笑い声）。コンピューターを自分の思い通りに使おうとして、どんどんと新しい能力を持ったコンピューターを開発するうちに、だんだんと立場が逆転しまして人間がコンピューターの奴隷になって来ている。ある人にとっては、コンピューターは神様になってしまう。大変恐ろしいことが起こって来ております。

人間の知恵というのは、そんなものではないでしょうか。自由だ、自由だと、私たちが思っているその自由、コンピューターを使ってもっと自由を得ようと思ったらとんでもないことであったという、これは一つの例であります。それではほんとうの自由とは何か、そしてほんとうの自由はどうしたら得られるかということ、これが今日の主題です。

イエス様が約束してくださった自由というものがいくつかあるのですが、まず恐れからの自由があります。人には健康に対する不安、将来に対する不安、孤独に対する不安、老後に対する不安、また社会人では仕事に対する不安もあるでしょう。また学生諸君は勉強とか受験に対する不安があります。また一般的に人間関係に対する不安、これはたくさんの人が持っている問題と言えるでしょう。地球を壊滅させることが出来るほどの核兵器が設置されている現在、今度戦争が起こったら一体どうなるのか、という不安も頭にこびりついております。

このような不安はなかなか自分で解決しようとしても難しいのですけれども、聖書によって神様ご自身が約束してくださっているように、イエス様が自由にしてくださるなら、私たちはそれらの不安から解放されます。ヘブル人への手紙13章5節、6節にこう書いてあります。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が私に対して何ができましょう。」

（ヘブル人への手紙13・5～6）

イエス様がそのような不安や恐れからこのように解放してくださるということを、私たちもヘブル人への手紙の著者と同様に言うことができます。またイザヤ書41章10節にはこう書かれています。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ書41・10）

イエス様が自由にしてくだされば、このような聖書のみことば、つまり神様の約束に頼れるようになるのであります。

他人からの自由、これも私たちにとって難しいことなのですね。他の人はどう思うだろうか、他人は何と言うだろうということを大変気にしながら生きている人が案外多いのです。小さな例ですが、私の大変身近かなあるお年寄りがこういうことを気にしています。「私が死んだら、私の遺族は、葬儀に来てくださった方々に失礼のないように応対出来るのだろうか。ちゃんと、恥かしくないように手落ちのないのように出来るだろうか」こんなことをほんとうに心配していらっしゃいます。もしイエス様がこのご老人を自由にしてくだされば、他の人がどう思うだろうか、自分の葬儀はどうなるだろうかなどという心配

から解放されると思うのです。なぜならイエス様はこうおっしゃってくださっているからです。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（ペテロの手紙第一5・7）

もっと厄介なものは自我であります。多くの人が自我というものが自分の最大の敵であるということを知っております。そして、どんなに努力しても修行をしても、自分を変えることが出来ないということを、努力すればするほど、修行を積めば積むほど知り失望します。しかし、もしイエス様が自由にしてくだされば我々はこの自我からも解放されます。なぜならばイエス様が私たちを全く新しく造り替えてくださるからであります。コリント人への手紙第二5章17節に、

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（コリント人への手紙第二5・17）

とありますが、私たちも、もしイエス様が自由にしてくださるならば、このような確信

を持つことが出来るのであります。

一番難しいものがあります。それは罪です。罪からの自由を私たちは決して自分の力で得ることが出来ません。誰一人として自分の力で罪から自由になることは出来ません。生れながらにして私たちに染み着いているこの罪の汚れをいくら善い行ないで擦(こす)っても、その罪を白くすることは出来ないのです。けれども、もしイエス様が自由にしてくださるなら、罪から解放され自由になることが出来ます。なぜならば、

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

（ローマ人への手紙6・6）

と書かれているからであります。

死からの自由、これも我々がどんなに努力しても決して手に入れることは出来ません。医学や医療がどんなに進歩してもそれはたかだか私たちのいのちを数年間、長くても十数年間延ばすことが出来るだけです。ある学者がタバコを喫う人と喫わない人でどの位寿命が違うのか研究しましたところ、数年の違いだということです。それぐらいならやはり喫

おうという方がおられるかも知れませんね。けれども、もしイエス様が自由にしてくだされば必ずやって来る恐ろしい死からも自由になることが出来ます。なぜならば、私たちはイエス様によって次のように信じることが出来るからです。

わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネの福音書5・24）

このようにイエス様ご自身が約束してくださっているからであります。またヨハネの福音書11章25節、26節には、

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

（ヨハネの福音書11・25～26）

というイエス様の有名なみことばがあります。

このようにイエス様によって自由にされますと、コリント人への手紙第一15章54節の「朽ちるもの（私たち）が朽ちないもの、死ぬものが不死（すなわちイエス様）を着る時

に死は勝利にのまれたというみことばが実現する」、またヘブル人への手紙2章14、15節の「人間はみな血と肉とを持っているので、イエスもまたこれらのものをお持ちになったのです。これは、イエスの十字架の死によって、悪魔という死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした」と言うみことばを受け入れることが出来るようになります。

恐れから自由に、あるいは自我から自由に、罪からそして死から自由にしようとおっしゃるイエス様は、いったい何の権威でこのようなことを言うことがお出来になるのでしょうか。もし私がイエス様と同じことを皆さんに言ったとしたらどうでしょうか。あの人はどうかしている、といって相手にもされないことでしょう。どんな人間の権威をもってしてもそのようなことは出来ないはずです。

けれどもイエス様は神様の権威をもって言われたのであります。なぜでしょうか。それはイエス様が神様だからであります。ではいったいなぜ神様が人となってこの地上に来てくださったのでしょうか。それはひとことで言えば死ぬためであります。十字架にかかって死ぬために、神様が人となってこの地上に来てくださったのです。その目的は私たちの身代わりとなって、私たちを先ほど申しました罪から、あるいは死から自由にしてくださ

るためでありました。ガラテヤ人への手紙5章1節に「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださった」とあります。またピリピ人への手紙2章6節から8節に、

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿とり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

（ピリピ人への手紙2・6～8）

とあります。私たちの罪、神様に対する罪はそのような高価な犠牲、高価な代価なしには赦されないほど大きなものなのです。そして父なる神様は罪の報いとして永遠に滅ぼされなければならない私たち人間をあわれんでくださり、私たちを造ってくださったその神様に背を向けて勝手放題に歩んでいる私たちを、何とかしてご自分ともう一度正しい関係、すなわち父と子との関係に立ち返らせようと思われ、驚くべき愛をもって私たちを救う計画を実行されたのです。それは神であるご自分の御子イエス様を私たちの身代わりに十字架につけるという方法でした。これ以外に、私たちを罪から、滅びから救い出す方法はな

かったのです。ほんとうに驚くべき神様の愛であり恵みであります。ヨハネの手紙第一4章9節から10節に、これもよく知られているみことばですが、

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（ヨハネの手紙第一4・9〜10）

と記されております。まったくその通りであると思います。

ここにまだイエス様を信じていらっしゃらない方がおられましたら、ぜひ申し上げたいと思います。イエス様は神としての誇りを捨てて本当に身を低くして人の姿となり、私たちのために十字架にかかって死んでくださったのです。もしそれを知っても「いいえ、私は結構です、そんな恵みはいりません」とおっしゃる方がありましたら、多分それはご自分の自我、誇りから出ていると思いますが、もう一度お考えいただきたいと思います。イエス様はご自分の神としての誇りを捨てて来てくださったのです。それもご自分のためにではなく、滅びるほかにない我々を救うためにそのような驚くべき愛を実行してくださっ

たのです。我々はちっぽけな自分のプライドのためにいつまでも心を閉ざしてこのような神様の愛と恵みを拒み続けてもいいものでしょうか。そのような誇りは早く捨てて、心の扉を開いて、素直に神様の恵みを受け入れるべきではないでしょうか。

イエス様ご自身がヨハネの黙示録の3章20節で呼びかけてくださっています。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（ヨハネの黙示録3・20）

信じるために、救われるために、私たちにいったい何が必要でしょうか。何も必要ではありません。ローマ人への手紙10章9節に、

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるのです。

（ローマ人への手紙10・9）

とあります。自分がほんとうに罪のために汚れて黒い者であるということを卒直に認めて、黒いままの姿で神様の前に出て、「信じます、不信仰なわたしを助けてください」と、

へりくだって言った時に、イエス様は十字架上で流された血によって私たちを清めてくださり、真黒な私たちの上から、真白いイエス様の衣ですっかり覆ってくださるのです。その時、今までの罪もこれから犯すであろう罪もすっかり私たちから消し去られて、神の子どもとされるのであります。素晴らしい恵みであります。イエス様がどなたであり、何のために来られたかということを知り、イエス様を救い主として信じる時に、私たちはイエス様の約束通り神様の子どもとして永遠に神の家に入ることが許され、すべてのものからほんとうに自由になることが出来るのであります。この約束は人間の約束ではありません。神様の約束であります。私たちは不真実ですけれども、神は常に真実な方であります。どうぞこの神様の恵みを、ほんとうに謙虚に、へりくだって受け取ってくださいますように、まだ信じていらっしゃらない方々のためにお祈りいたします。



ききょう

天国への招待にふさわしい者

イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。」』

ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。だから、大通りに行って、出会った者をみ

な宴会に招きなさい。』

それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。ところで、王が客を見ようとしてはいって来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここにはいって来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。』と言った。

招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」

（マタイの福音書22・1～14）

今年初めての家庭集会ですが、大変寒いところを、また遠くからも大勢の方々がおいでくださりありがとうございました。今日ご一緒に考えてみたいと思ったのはマタイの福音書22章1節から14節です。少し長いのですが、このテーマは、天国に招待されるのにふさわしい者は誰か、ということなのです。天国という言葉が出てきますと、それに対比して地獄を考えます。この箇所を読みますと、私たちのこの世の先には、天国か地獄かのどち

らかしかないということがはっきりしてまいります。私たちが住んでいるこの地上の人生はどちらでもありませんが、やがて我々は天国に行くか地獄の底に行くかのどちらかになるわけです。

そこで最初にお読みいたしました通り、イエス様は天国に行くにふさわしい者はどういう者かということについて、たとえ話をもってわかりやすく話してくださっております。このたとえ話を解くキーと申しますか、鍵がいくつかあります。そのキーワードを申しますと、ここに出てくる「王」とは父なる神様であり、「王子」は御子であるイエス・キリストです。また、始めに「招待しておいたお客」とありますのはユダヤ人、イスラエルの国の人たちで、3節に出てくる「しもべたち」は預言者、4節に出てくる「別のしもべたち」はイエス様の弟子たち、使徒たちととっていいと思います。それから、7節の「焼き払われた町」はエルサレムであり、9節の「大通りで出会う者」とは弟子たちが福音を宣べ伝えようとしている異邦人、つまりイスラエル人以外の国の人々であります。11節で王が客に接見しようと入って来るところがありますが、これは最後の審判を現しています。13節に王が怒って「外の暗やみに放り出せ」と言うところの暗やみとは地獄、ゲヘナのことであります。

このようにキーワードを使ってこの箇所をもう一度見てみますと、天国とは御子イエス様のために結婚の披露宴をもうけた神様にたとえられています。神様はまずイスラエル人を天国に入る者としてお選びになって、彼等を招くために預言者たちをお遣わしになった。ところが彼らは来たがらない。そこで神様はもう一度鄭重（ていちょう）に洗礼者ヨハネやイエス様の弟子たちを派遣して、「あなたがたを祝宴にふさわしい人として選んだのだから来てください」と懇願されました。けれども、彼らは神様の懇願を無視して、来るどころか、自分勝手なことをしました。それだけではありません。神様から遣わされた人たちである使徒たちを迫害し、殺してしまいました。このことは歴史にもはっきりと記されています。

そこで、神様は怒られて、イスラエルの首都エルサレムを滅ぼされます。事実西暦七十年、ローマによって徹底的にエルサレムが破壊されています。そして、8節にありますように、イスラエル人が招待客にふさわしくないとおっしゃって、使徒たちにイスラエル人以外の異邦人を招くようにと言われたのです。そこで使徒たちは大通り、すなわち世界中に散って行って、いい人でも悪い人でも区別なく宴会場に集めたわけです。神様は集まった人たちが祝宴にふさわしい人かどうかご覧になるために宴会場にいらっしゃると、そこに一人礼服を着ていない者がいるのを見つけられました。そこで、神様はその人を祝宴、

つまり天国にふさわしくない者として、裁かれて、地獄に放り出されたのです。これがこのたとえ話の内容です。

ここで、まず天国への招待とはどんなものか、次に、天国に招待されるのにふさわしい者になるのにはどうしたらよいか、ということが問題になります。この二つのことをイエス様ご自身が歴史的事実を示しながらここで説明してくださっていると受け取ることが出来ます。

私たちは、このたとえ話から、天国に入る資格というのは、自分の力、あるいは自分の知恵で手に入れることは出来ないのだということがわかります。人間は神様に背いて以来神から離れて、自分の努力や知恵や力を頼りにして生きて来ました。この人間の性（さが）、これが罪なのです。ですから、我々は、生れながらに持っているそのような、罪のあるままでは天国に入る資格を得ることは出来ません。ここに書かれておりますように、王様がご自分の王子の披露宴に来てくださいと招待してくださる。そのような恩恵による以外に、自分の努力で披露宴、すなわち天国に入ることは出来ないのです。常識から申しますと、王様がしもじもの人たちに「王子の結婚の披露宴が整ったから来てください」などと言うことは考えられません。けれども、そのような、人間から見て考えられない恩恵が神から与

えられているということがここにはっきりと示されているわけです。

たとえば、個人的に私のこととして考えてみますと、神様からの恩恵で与えようと言ってくださる罪の赦しをただ感謝して私が受けさせていただく、私の方からは何の努力も知恵も差し出さなくても一方的な恵みをお受けするだけで罪が赦されるということです。これはあまりにも都合の良すぎる話で、人間社会の通念では考えられないことですが、これが神様の愛なのです。にも拘わらず、初めに神様に選ばれたイスラエル人は、この神様からの恩恵を拒絶しただけではなく、これも歴史的な事実でありますが、イエス・キリストまで殺しています。そこで、イスラエル人の背きによって、神様はその恩恵をイスラエル人以外のすべての国の人々に与えられたわけです。もちろんこれらすべてのことは神様のご計画によるものです。ローマ人への手紙11章11節に「彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです」とあります。

では、異邦人すべてを神様がこの宴会に招待されたのかと言いますと、まったくその通りなのです。マタイの福音書22章にもどりまして、10節に「しもべたちは、通りに出て行って、良い人も悪い人も出会った者をみな集めた」とありますように、使徒たちは世界中から、人間の目から見て善良な人、行いの良い人、また悪事を働いた人、悪い心を持っ

た人など出会ったすべての人を招いて来たのです。では、これらの招かれて来たすべての人が祝宴に出ることが出来るのでしょうか。いいえそうではないのです。それでは、どんな資格が必要なのでしょうか。11節と12節にありますように、ただ一つ必要なことがありました。それは、婚礼の礼服を着ているかどうか、それだけでした。婚礼の礼服を着ている者はすべて祝宴、つまり天国に行くことが出来ますが、着ていない者は暗やみに放り出され、地獄に行かなければならないのです。

私たちの習慣から考えますと、ちょっと理解しにくいところがありますので、少し調べてみましたところ、この当時のイスラエルの王侯貴族の祝宴に行くのには必ず礼服を着て行かなければならないという習慣があったそうです。通りすがりの人たちをにわかに招待しても礼服など着ているはずがないではないか、と思われるかも知れませんが、これも調べてみると不思議ではなくて、王侯貴族の屋敷にはそのような習慣があるためにいつも貸すための礼服がたくさん用意されていたということです。持っていない人は借りて着ればいいわけです。ですから、礼服を持っているか、いないかは問題にならなくなります。むしろ、礼服を着るとはいったいどういう意味なのかということになります。ここに問題がしぼられて来ます。

この礼服にはどういう意味があるのでしょうか。これは義という名の礼服であると考えていいと思います。では、どうして私たちが義という礼服を着なければ神様は天国に入る、あるいは祝宴に連なることを許されないのか、このことが大きな疑問になって来ます。その答は、招いておられる王様、神様は完全な方であり、また全く正しい方であるがゆえに、義の服を着ていない客を認めることが出来ないということです。招く方が完全に正しい方ですから、招かれる人も正しくなければだめなのです。正しくない者を正しいと認めることを神様はなさいません。私たちは神様の前に正しいと申し開きをすることが出来るかと言いますと、とても出来るはずはありません。もちろん、相対的に申しますと私たち人間は、あの人より自分のほうが多少は正しいなどと言えるかも知れませんが、先ほど申しましたように完全に正しい神様の前に立って、「私は絶対に正しい者です」とは言えないのです。なぜならば、どう考えても私自身神様を中心にして生きて来た、とは言えないからです。自分中心の思いに従って生きて来たということは、神を第一にしていなかった、神に従っていなかったということなのです。

そのような私たちを、神様が正しいと認めてくださるためには、義の衣を私たちが着なければならないわけです。では、この義の衣とはいったい何かと申しますと、もうおわか

りのように、イエス・キリストご自身なのであります。ここで聖書を開いてみたいと思いますが、コリント人への手紙第二の5章21節をお読みいたします。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

（コリント人への手紙第二5・21）

ここに書かれております通りに、神様は私たちの罪を取り除いてくださるために、罪を知らない方、神の御子であるがゆえに罪のないイエス・キリストに私たちのすべての罪を負わせ、十字架にお付けになったのです。イエス・キリストが十字架の上で身代わりとなって死んでくださったゆえに、私たちは神様の前に義と認めていただくことが出来るようになったのです。ローマ人への手紙4章25節にも同じようなみことばがあります。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

（ローマ人への手紙4・25）

けれども、このことを私たちが、「ああそうだったのか、イエス・キリストとはそんな方だったのか」と頭で認識するだけでは、義の衣を着たことにはならないのです。私たち

がほんとうに心から、イエス・キリストは私の罪の身代わりとなって、十字架にかかってくださった、そしてそれによって私の罪は赦されたのだ、ということを受け入れた時に、私たちは義であるイエス・キリストを着たと言うことが出来るのです。イエス・キリストを信じ受け入れることがイエス・キリストを着たということなのです。

ユダヤ人たちも神様に従おうとはしました。そして、そのために神様から自分たちに与えられた掟（おきて）であり戒めである律法を守って行くことによって、神様の前に正しい者と認められようとしたのです。しかし、どんなに努力しても神様の律法を完全に守ることは出来ません。すでにお聞きになったと思いますが、人の物を盗むな、人を殺すな、という戒めがあります。けれども、盗むということは欲しいという気持ちがあるからその結果として盗むのであり、殺すということも憎いという思いがこうじて殺人を犯すことになるのですから、欲しいと思うことも憎いと思うことも罪になるわけです。殺すという行為はなくても、憎いという思いがあればもうすでに律法に背いているわけです。人を憎いと思ったり人のものが羨ましいと思ったりしたことのない人はいないはずです。それほど人間は皆自分中心であります。絶えず人と自分を比べて、自分を誇ったり、人を裁いたり、軽蔑したりします。多かれ少なかれ人間は皆そうです。それがすべて神様から見て罪なのですか

ら、ユダヤ人たちが自分で自分をよしとしているような律法の守り方ではとても神様から義と認められるはずはありません。ピリピ人への手紙の3章9節に、

律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

（ピリピ人への手紙3・9）

とありますように、イエス・キリストの義を持つことによってのみ義とされるのであります。同じようにガラテヤ人への手紙3章27節には、

バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。

（ガラテヤ人への手紙3・27）

キリストを信じる者はキリストを着たと書かれております。

私たちがそのようにして、キリストの義、キリストの清さを着る時に、私たち自身は罪にまみれていても、イエス・キリストのゆえに、神様の前に、義と見なされて立つことが出来るわけです。ヨブ記の中でヨブが「私は義をまとい、義は私をおおった」と言ってお

りますが、私たちがイエス・キリストの義を着る時に、私たちの罪が義によっておおわれるのです。

婚礼の礼服を着ていないということは、自分の服を着て神様の招きに応じたということですが、そのような場合、その人が人間的に見てどんなに善い人であっても、その人の服がどんなに立派であったとしても、また、たくさんの勲章、たとえば善行、努力、業績、地位、名誉、などのピカピカした勲章をいっぱいに付けて飾り立てられた服を着ていたとしても、それは婚礼の服を着ているとは認められないのです。そのような服を着た人は神の裁きによって天国に行けず地獄に行かなければならないのです。

しかし、自分の罪を認めてイエス・キリストを着た人は、たとえその人がどんな人であろうと、自分の服がどんなにボロであろうと神様の恵みとあわれみによって天国に招待されるのです。ローマ人への手紙の3章24節に、

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

（ローマ人への手紙3・24）

とあります。神様が私たちにそれだけの価値がなくても、価なしに義と認めてくださる

のでなければ、私たちはとうてい義とされることなど期待し得ません。ですから、イエス・キリストを着るということが、天国に入るのにふさわしい者になるための唯一の方法なのです。

この箇所を読む時に、私たちは神様の恩恵を深く感じるとともに、何と人間は愚かな存在であるか、ということもわからされます。ここで、神様がご自分でお造りになった人間、しかも造り主から背き去った人間に対して、「どうぞお出かけください」とおっしゃって、何とかして背きの罪から救い出したいと招いていてくださるのです。このような光栄あるご招待を私たちは、自分の仕事が忙しいからとか、自分の欲しいものは他にあるとか言って拒んだり、神様が貸してくださる礼服を着るのがいやだと言ったりしてよいものでしょうか。もしそうするならば、これこそがまさしく自己中心であり真理に対して盲目な自分の姿なのです。

ところで、神様はいつまでも忍耐しながら私たちが招待に応じるのを待っていてくださるでしょうか。そうではないのです。ここに婚礼の礼服を着ていないものは外に放り出されるとあります。それはいつかと申しますと、イエス様がもう一度、こんどは救い主としてではなく裁き主としてこの世にいらっしゃるその約束の日であります。その日がいつか

は、知らされておりませんが、いろいろな箇所にその日のことが書いてあります。マタイの福音書の24章44節に、

あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子（イエス様）は、思いがけない時に来るのですから。

（マタイの福音書24・44）

と書いてあります。もう少し前の24章37節から39節を見ますと、

人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

（マタイの福音書24・37～39）

とイエス様はおっしゃっています。いつおいでになるかはわかりませんが、かならずおいでになる、そして突然おいでになる、ということがここからもわかります。その日にはいったいどうなるのかと申しますと、マタイの福音書の25章31節から34節に、

人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子は

その栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」

（マタイの福音書25・31～34）

と記されております。このように右に分けられた人たちは天国を継ぎなさいとイエス様から祝福されます。それに反して、左に分けられた人たちはどうなるかと言いますと、少し後の41節に、

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」

（マタイの福音書25・41）

と言われてしまうのです。永遠の火、つまり、永遠の刑罰に入らなければならないのです。右に分けられた人たちとは、イエス・キリストを着て義とされた人たちでありまして、永遠のいのちを与えられて天国に入ることを許されるのです。25章46節で、

こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。

（マタイの福音書25・46）

とイエス様が結ばれた通りであります。ここで正しい人とは、イエス・キリストを着た人という意味であることはもうおわかりのことと思います。

私たちは、日常の生活の中でいろいろなものに対して恐れを感じることがあります。一番怖いのは人間だとよく言います。人の心の中を見ることは出来ませんから、たしかに怖いかも知れません。けれども、いちばん恐れなければならないのはこのように裁きをされる神なのです。ルカの福音書の12章4節と5節から少し見てみたいと思います。

そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

（ルカの福音書12・4～5）

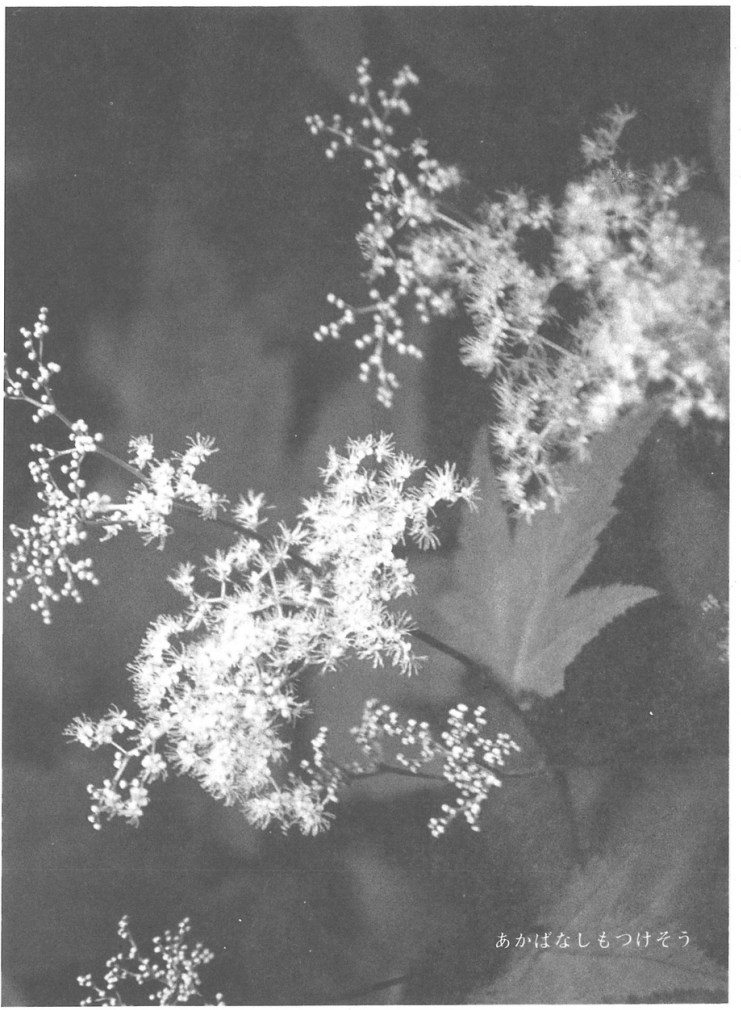
これはイエス様がおっしゃっているのですが、たしかに人間が怖いと言ってもせいぜい

肉体を殺すことしか出来ません。それ以上は何も人間に出来ないのです。ところが、神様は肉体の死などというものではなくて、その後で最後の裁きによって地獄に投げ込む権威を持っておられますから、この方を恐れなければならないのです。

最後の裁き、その日、人の子の来る日、終わりの日などといろいろに書かれておりますが、その恐ろしい最後の裁きの日が来る前に、一人でも多くの人が天国に入れるように、イエス様の十字架の死に免じて私たちの罪を赦してくださり、「イエス・キリストを着て天国への招待を受けてください」と神様の方からへりくだって招いてくださっている今、感謝してこの素晴しい恩恵をぜひ受け入れていただきたいと思います。最後にコリント人への手紙第二6章1節と2節からお読みして終わりたいと思います。

私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください。神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

（コリント人への手紙第二6・1～2）


あかばなしもつけそう

神の標準と人の標準

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。

（コリント人への手紙第二5・15～16）

今日はこの箇所からご一緒に考えてみたいと思います。人間的な価値基準に立った場合と神の価値基準に立った場合とでは、私たちの生きかた、物の考えかた見かたがどう違うかということがテーマになります。この違いは、イエス様に救われた方とそうでない方との生きかたにおける根本的な相違と考えてよいと思います。今日のみことばでパウロが「かつては人間的な標準でキリストを知っていた」と言っておりますが、人間的な標準で

聖書を読む、あるいは神を知ろうとする方がたくさんいらっしゃいます。ほとんどの方がそうであるといってもいいのではないかと思います。ところが、人間の見かた、人間の知恵で聖書を読みましても、そこに出て来るイエス・キリストは、預言者の一人、あるいは立派な信仰者、非常に道徳的にすぐれた人としてしか見られないのではないでしょうか。あるいは、極端な場合には、自分を神の子などと言う頭のおかしい人と見てしまうかも知れません。あるいはまた、キリスト教という宗教の創始者ではないかと考える方もあるでしょう。けれどもそうなるとイエス・キリストを、釈迦とか孔子とかマホメッドのような宗教の創始者と同じにしか見ることが出来ません。人間の知恵で考えればせいぜいその程度です。

聖書を読んでみてイエス・キリストの教えはとても素晴らしいと思われる方も少なくありません。イエス・キリストの教えをご自分の生活信条にしようと教会に通われるような方も多いのです。教会に行っているからクリスチャンだと思っている方もあります。そういう方は「私は自分の考えがキリスト教に合っているから一つの宗教としてその教えを信じているけれども、他の人は他の宗教を信じても別にかまわない、新興宗教ではなくて伝統的な宗教であれば何でもいいのではないか、信仰心を持つことが大切なのだから」とい

う考え方になってしまいます。しかしこれも人間の標準でキリストを見ていることにほかなりません。

パウロもかつては大変熱心なユダヤ教の信者でありました。ユダヤ教の信者は旧約聖書の中にある神の戒めを守ることを信条としており、神は唯一であり、全知全能であり、永遠から永遠にわたって存在する方であることは信じておりますが、イエス・キリストが神の子であり救い主であるということを拒む人々であります。パウロは非常に熱心なユダヤ教徒であっただけに、イエス様が父なる神様に「父よ」と呼びかけたり、多くの人に「あなたの罪を赦す」と言われるのは許すべからざることであったわけです。ここで罪と申しますのは神様に対する背きの罪ですが、この罪を赦すことは神様にしか出来ないのに、自分で罪を赦すなどと言うイエスはとんでもない人間で、神を冒瀆（ぼうとく）する者であると思い込んでしまったわけです。

そしてただ思っただけではなくて、彼はそれを行動に移しました。イエスの弟子たちを次々に迫害します。これは自分が信じている神様のためだと思ってしていたのですが、その彼が復活のイエス様に出会ったのです。そのところを使徒の働き9章からお読みいたします。

さてサウロ（パウロの前の名前）は、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町にはいりなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」

（使徒の働き9・1～6）

最初天からの光に照らされてイエス様の声を聞いた時、パウロにはそれが誰であるかわかりませんでした。けれども、答えを聞いた時に彼はすぐにそれがイエス様だと知りました。神様の啓示によって知ることが出来たのです。パウロはそれまで弟子たちを迫害していたのですが、イエス様は彼に、「あなたが迫害してるイエスである」とおっしゃいました。この時サウロはイエス様がどなたであるかを悟ったのです。そして、自分が迫害して

いたのがイエス様ご自身であったことを知りました。彼の心の目が開かれて、イエス様をそれまでの人間の標準ではなく、神の標準で見ることが出来るようになったのです。イエス様が神の子であることも、十字架の上で彼自身の罪を負って死んでくださったことも、そして語っておられるのは復活のイエス様であることも一瞬にしてわかりました。そして自分の生きる目的も同時に知ったのです。これが先ほどお読みしたところに彼自身の言葉で証しされています。彼の言葉を言い替えますと、イエス様が十字架の上で死なれたのは人間が自分の標準で生きるのではなく、神様の標準で生きるためであるとパウロは言っているのです。

では人が人間の標準で生きるのと神の標準で生きるのとにどんな違いがあるのでしょうか。たとえて言いますと、それはモノクロームの写真、白黒の写真を見るのと、カラー写真、天然色を見るのとの違いと言っていいのではないかと思います。同じ風景や花を写した場合でも、モノクロームの写真で見ますと被写体の形はカラー写真と同じに見えますが、どんな色をしているのかはわかりません。人間が自分の標準で人や物を見る時は、ちょうど色がわからないで形だけで判断しているようなものだと思います。私たちはモノクロームの写真を見る時に、その花がどんな色をしているのか想像する以外にないのです。Aさ

んはこの花は白い色をしていると言う、Bさんは藤色だと言い、Cさんはピンクだと言う、それぞれがその花の色を自分の判断で、自分の標準で考えるしかないわけです。結局人間的なものの見かたをしていますと、それぞれ自分の主張するところに基づいて、自分の判断が正しいといいますから意見が合うはずがありません。このことを聖書の士師記21章25節から見てみたいと思います。

そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。

（士師記21・25）

これは歴史的な事実であります。初め神はイスラエルで人間の間に王を立てることをなさらず、神様とイスラエルの民族一人一人との関係を望まれました。預言者はおりましたが、王様はいなかったのです。ところが人間の罪の姿はどんどんひどくなり、士師記を読むとわかりますがこの時代は大変な混乱で神に対する背きの罪どころか、人間どうしで裏切ったり殺したりいろいろとひどいことが起こりました。これはちょうど、我々が人間の標準で自分の思いに従って行くとどうなるかということを示しているのではないかと思います。

けれどもいったん神様の標準でものを考えるようになりますと、モノクロームの写真では見ることが出来なかった色が一つ一つの対象物についてよく見えるようになります。カラー写真でみるとどの人が見ても黄色い花は黄色く見えますし、青い空は青く見える。このように皆一致して同じ正しい色で見ることが出来るようになります。つまり物事の本質的な意味がわかるようになります。

そしてまた人を見る目も違ってきます。人間の標準で生きていますと、なかなか人に対して心を開くことが出来ません。他人ともうわべはにこやかに付き合っておりますが、自分の心のまわりに堅く城壁を築いています。相手は何を考えているのかと思い、自分のガードを固くしてしまいますから、なかなか本心を打ち明けられません。皆様もご経験がおありかも知れませんが、私などもそうでした。せいぜい心を打ち明けられるのはごく近い家族だけ、それさえ出来ないことすらあります。しかし神様の標準で生きるようになりますと心の城壁が取れて、他人に対する気持ちが全く違ってきます。相手の方も自分と同じく神様に愛されている方であることがわかってきます。初めてお会いした方であっても同じです。特に相手がまだイエス様をご存じない方であれば、一人でも多くの人が救われて永遠のいのちを持つことを神様が望んでいらっしゃるのですから、どうぞ神様この方を

お救いください、と祈る気持ちが与えられます。そうなりますと努力しなくても自然に心が開かれて、寛容になってきます。ご自分ではおわかりにならないかも知れませんが、イエス様を信じる前と後で皆さんがそのように変わられます。

人はなかなか自分で自分を変えることは出来ませんが、イエス様を信じるとどうしてこのように変わるのでしょうか。それは自分はほんとうに愛されているということを知るからであります。「イエス様は私の罪のために十字架にかかるほど私を愛してくださった、そして今でも愛し続けてくださっている」ということを素直に受け入れることが出来るようになるからであります。イエス様が、神様から離れていた罪のために永遠に滅びなければならなかった自分と神様の間に立って和解させてくださった、ということを知るからであります。このことを聖書から見てみたいと思います。コロサイ人への手紙からお読みいたします。

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあったのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

（コロサイ人への手紙1・21～22）

悪い行ないというのは、神様を認めずに自分勝手な道を歩むことであります。どなたもきっと思い当たられることだと思います。神の子であるイエス様が肉体を持ってこの世の歴史の上に現われてくださり、私たちと同じ痛み、苦しみを持つ人間としてこの世を歩んでくださり、定められた時に十字架にかかって死ぬことによって、そのように背いていた私たち一人一人を神様の前に正しい者としてくださったのです。こうして私たちは罪とその報いである死から解放されたのです。ローマ人への手紙に、

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは、決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ人への手紙8・1～2）

とある通りです。神に受け入れられたキリスト者は人をも受け入れることが出来るのです。このような神様の絶対的な愛を自分のものとして受け入れた時、人は他人をも愛することが出来るようになるのです。

ここで私たちが知らなければならないことがあります。それはいわゆるヒューマニズムと

神様の愛とを混同してはいけないということです。ヒューマニズムとは何かと申しますと、いろいろな定義があると思いますが、いちばん簡単に言えば人間を愛する、人間を尊重する、人間を擁護する、人間を完成しようという主義であります。ところが今まで考えて来ましたように人間の標準でほんとうに人間がお互いを尊重したり、愛したり、擁護したり、まして完成したり出来るでしょうか。先ほどから申しましたように、人間的な基準、標準というのは、結局自分を中心にして判断し主張することです。ですからAさん、Bさん、Cさん皆考えが違います。そういう人間が人間を愛したり、尊重したり、完成したりすることは出来るはずがないとお思いになりませんでしょうか。

確かに、素晴らしいヒューマニストと言われる人々がいます。愛に満ちて、人のために自分を犠牲にし、素晴らしい行ないをして大変尊敬されている方がおられます。私の先輩に人間的に大変立派な方で、出世も何も犠牲にしてエチオピアでマラリアを撲滅するために非常な功績をあげた方がおられます。かつてのエチオピアではマラリアが蔓延し、たくさんの人々が死んで行きました。そこに自ら乗り込んでいって、現地の若い人たちを訓練し、教育して一緒にマラリアと闘ったのです。そして、何十年という年月をかけて大変な苦労の後に成功しました。その素晴らしい働きにエチオピアの人々は彼を神様のように崇

めました。貧しい人から皇帝までほんとうに彼に感謝し、彼を敬いました。もちろん彼自身もエチオピアを、アフリカを、心から愛しているのです。革命が起り、彼は日本に帰って来ました。そして先日十数年ぶりでエチオピアに行かれたところ、大歓迎を受け、彼を知っている人々は涙をこぼして喜んだそうです。ほんとうにエチオピアの英雄なのです。私もその方が大好きです。その彼が先日私に述懐されたことは、その後エチオピアではマラリアで死ぬ人が減ったために人口が増えてますます貧しくなり飢える人が増えたということでした。彼が生涯をかけて良かれと思ってしたこと、つまりヒューマニズムの結果はそれでありました。私はこの敬愛する友人が一日も早く神様を知って救われて欲しいと切に祈っております。

人間が人間を愛し、尊重し、完成させることはほんとうの意味で出来ないのですが、神様は私たち人間を完全に愛し、尊重し、完成に導いてくださることの出来るお方です。イザヤ書43章1節と4節を見てみたいと思います。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」

（イザヤ書43・1、4）

神様が私たちのようなものを高価で尊いと言って尊重してくださっているのです。一人一人の名を呼んで、わたしはあなたを愛していると言ってくださっているのです。次にコロサイ人への手紙3章9節と10節を見てみますと、

あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

（コロサイ人への手紙3・9～10）

イエス様を信じた者は新しい人とされ、神様に似た者とされ、なおますます新しくされて完成に導かれるという意味であります。私たちキリスト者はそのために愛の鞭（むち）による訓練を受けますけれども、それは神様が私たちを愛し、尊重してくださっているからであり、完成させようとしてくださっているからであることを、このみことばから私たちは確信することが出来ます。

もし先ほどのヒューマニズムがほんとうに正しければ、人間はそれにのっとって努力し、愛し、尊重してゆけば戦争は無くなるはずです。戦争と言ってもいろいろなものがありま

す。まず家族の中の争いは無くなるはずです。また政党間の争いも無くなるはずです。だんだん大きくしてゆけば国と国との争いも無くなるはずです。けれども人間の歴史が始まって以来、そんなことは起こったためしがありません。ある人は社会が悪いといって社会改革をします。そんなことで社会は良くなったでしょうか。フランス革命はその代表的な例だと思いますが、革命後どうなったかと言いますとそれ以前と大して変っていません。人間が考え人間の標準で行動している限りうまくはゆきません。そこでパウロはどう言っているでしょうか。ピリピ人への手紙の3章7節と8節を見てみたいと思います。

私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ人への手紙3・7～8）

その箇所の少し前をみますと、かつてパウロは非常に人間的に誇るものをたくさん持っていたことがわかります。生粋のユダヤ人（当時ユダヤ人は神に選ばれた民であった）で、律法についてはパリサイ人（ユダヤ人中のユダヤ人で最も誇り高いグループに属する

人々）神の戒めを熱心に守ることを誇る人たちの一人でありましたし、高等教育を受けた能力のある学者であり、神様に対する信仰も間違ってはいたのですが、教会を迫害するほどの熱心さを持っており、律法を守ることにおいては非の打ちどころのないほどの人でありました。その上、当時ローマ帝国の支配下にあったユダヤでローマの市民権を持っていたほどの特権階級だったのですが、それらのものすべてはキリストを知った時、全く色あせて、彼はそれらを塵芥（ちりあくた）であると言うようになりました。キリストの素晴らしさに比べた時、そのような人間的標準から見て価値あるものをいっさい損と思うとまで言っております。

イエス様を知って、人間の標準から神の標準で生きるようになった人たちはほんとうに価値のあるものは何かということがわかって来ます。物事の正しい価値を知るようになりますので、それまで自分の基準で価値があると思っていたものが実はそうではなかった、ということを知ります。

このように申しますと、イエス様をご存じない方は、キリスト者は世捨て人ではないか、とおっしゃるかも知れません。この世のものは皆塵芥（ちりあくた）だなどといって、天国にしか希望も幸せもないのか、とお思いになるかも知れません。けれども、決してそうではないので

す。神の標準で物事を知るようになった人はほんとうの価値がわかります。まず、家庭の中での争い、これは大変不幸なことなのですが、これが無くなってきます。家庭の中の一人一人がそれぞれ自分の基準によって生きる時には不一致が起こりますが、家族の一人一人が神様につながり、神の基準によって生きるようになりますと、不協和音がなくなります。そのように神様によって生れ変わったご家族が今日もたくさんこの集会にいらっしゃっております。そこにほんとうの幸せ、平和、喜びがあります。この世にあっての幸せがあるわけです。私も神様の標準で生きていますけれども、弱い者ですから、時々人間的な標準に戻ってしまうことがあります。そして人を見たり、自分を見たりしてしまいます。けれども、いったんほんものの自由とか平和を体験した者、イエス・キリストの素晴らしさを知った者はすぐにほんとうのところ、つまり神の標準に戻ることが出来ます。というよりは戻りたくなります。ですから、私たちは恐れることがありません。どうか、まだイエス様をご存じない方は一日も早く神の標準に従うことがいかに素晴らしいか、人の標準に従うことがどんなに空しいかをお知りになって、イエヌ様に従う喜びの人生をお送りいただきたいと思います。



やましゃくやく

三つのうめき

私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

（ローマ人への手紙8・22、23、26）

今日は、三つのうめきという題でローマ人への手紙の中から考えてみたいと思います。

初めに被造物のうめき、二番目にキリスト者のうめき、三番目が御霊のうめきで、この三つが平行して8章の22、23、26節に書いてあります。聖書に書いてある順番に従って、考えてみたいと思います。

まず、被造物のうめきについて。被造物とは何かと申しますと、全知全能であり、創造主であられる神様によって造られたもの、私たちを含めて宇宙の中に存在するすべてのものであります。神様によって造られたもの、被造物すべてがうめき、ともに産みの苦しみをしていると22節に書いてあります。

いったい、これはどういうことなのでしょうか。ここだけ読んだのではなかなかわかりませんが、神様は創造の初めにいろいろなものを一つ一つお造りになって、その度にそれをよしとされたと創世記に書いてあります。少しお読みいたしますと、例えば、創世記1章4節に光をお造りになってよしとされたとあります。また10節には海をお造りになってそれをよしとされた、12節には植物をお造りになってそれらをよしとされた、18節には昼と夜をお造りになってそれらをよしとされた、鳥や獣をお造りになった時もそれらをよしとされたとあります。そのように、神様はご自分が造られたものをご覧になってすべて満足なさいました。というのは、すべて神様の御心の通りに出来たからです。我々人間もそ

のようにお造りになったのです。そして、これらすべての被造物は神様の栄光を現すために造られたのでした。

ところがすべての被造物は、神様の思いのままに神様の栄光を現すために造られたにも拘わらず、人間の欲望を満たすために使われてしまったのです。神様によって造られた人間がどうしてそのようなことをしてしまったのでしょうか。

神様は人間をお造りになった時、ご自分に似るようにお造りになった、そして地にあるすべてのものを支配させようとお思いになった、と26節に書いてあります。特別に愛して御自分に似る者とし、人格を持たせて神様に心から従って行く者として造ってくださったその人間にすべての被造物を管理させようとお思いになったわけであります。

それなのに、人間はその与えられた人格や自由意志を正しく用いることをせずに、神様の命令に背いて、「それだけは食べてはいけない、それを食べると必ず死ぬ」と言われた善悪を知る木の実を誘惑に負けて食べてしまったのであります。こうして、最初の人間アダムとエバが神様に対して背きの罪を犯し、楽園であったエデンの園を追放され、罪の報酬として死を与えられた者となったのです。それ以来、罪ある者となった人間の子孫である我々人間は生れつき罪あるものとなってしまったのです。これが原罪であります。

それ以来被造物は人間によって痛めつけられて来ました。罪を持った人間が被造物を正しく管理出来ないのは当然のことであり、人間は自分たちの欲望のためにそれらの被造物を欲しいままにして来たというのが現状であります。そのために、被造物はうめいている。擬人型ですが、そのように書かれているのであります。ここで、エレミア書12章4節を見てみましょう。

いつまで、この地は喪に服し、すべての畑の青草は枯れているのでしょうか。そこに住む者たちの悪のために、家畜も鳥も取り去られています。

（エレミア書12・4）

ここに書かれているように、神様がお造りになったこの地球の美しい自然が明らかに目に見える形で人間によって破壊されて来ているのは、皆様もご存知の通りであります。多くの生物は人間のために姿を消しつつあります。私たちの生活がより快適に、より豊かになるために、また私たちがより長く生きるために、私たちはあらゆる手段を使っておりますが、その犠牲になっているのはこれらの被造物たちであります。

人工衛星が地球の周りをぐるぐるまわって写真を撮っているのですが、アマゾンを二、三年おきに撮影したフィルムが先日テレビで放映されました。そこでは緑の破壊されて行

く様子が生々しく映し出されていました。私も一九六四年に一か月ほど日本人移住者の健康調査のためアマゾンの中を行ったり来たりしましたが、その時は、ほんとうに神様がお造りになったままの美しい自然がそこにありました。もちろん、人間はその頃も開発を進めておりました。アマゾンの大密林は、神様の摂理に従って使えば美しい自然が保たれるのですが、ひとたび大規模な開発が始まりますと、再びもとの状態に戻すことは不可能なのです。一度広範囲に木が伐採されてさとうきびなどの作物が栽培されたり、地下資源が開発されますと、もうあの緑は戻って来ないのです。ジャングルでは大きな木から葉が落ちてそれが木陰で自然の肥料となって次の木が育って行くのですが、木が伐採されて裸の土地になりますと、熱帯の強烈な日光と雨で天然の肥料が全部分解され流されて、もう二度と木の生えない砂漠のような荒れ地になってしまいます。

上空から衛星で見ますと、緑の美しいジャングルに、始めは引掻き傷のように開発のための道が造られます。美しい緑の中に赤茶けた道が縦横無尽に造られているのが写真でよく見えます。それが、次にはどんどんと広がって火傷のあとのような無残な姿になって行くのです。アマゾンだけではなくて、赤外線カメラで写しますと、アフリカであろうとアジアであろうと、どんどんと砂漠化の進んでいるのがわかります。まさに人間の欲望のた

めに自然が浸蝕されているのであります。

それ以外にも、エネルギーを作るために石炭や石油を燃やしたり、またいろいろな化学物質を造り出して人間の生活がますます便利になる一方、それらの物から出る廃棄物などによって空気や水などが汚染されて、地球上に生きている生物の大変微妙なバランス、これをエコシステム、生態系と言いまして、小さなバクテリアから大きな動物や植物に至るまで、全部が互いに関係を持ちながら微妙なバランスを保って繁栄している、このバランスが人間の手によって崩れてしまう。そして、次々に連鎖反応を起こして生態系が破壊されます。このようなことが、現在どんどんと進行しているわけです。

さきほどお読みいたしましたエレミヤ書の9章10節を見てみますと、

私は山々のために泣き声をあげて嘆き、荒野の牧草地のために哀歌を唱える。そこは、焼き払われて通る人もなく、群れの声も聞こえず、空の鳥から家畜まで、みな逃げ去っているからだ。

（エレミヤ書9・10）

では、いつこの被造物は苦しみから解放され、うめきが喜びに変るのでしょうか。それはイエス様のご再臨の時なのです。その時、被造物も滅びの束縛、人間の罪による束縛か

ら解放され、神様が初めにお造りになった通りに完全なものに回復されるのであります。天にあるもの地にあるもの万物が完全な姿に回復するのです。イザヤ書からそのことを少し見てみたいと思います。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳のみ子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

（イザヤ書11・6～9）

これがイエス様ご再臨の時の被造物の姿なのです。完全にされた被造物はこのようにしてほんとうの平和の中で神様を賛美し、神様の栄光を現すものとして生活するその情景がここに描かれています。今はまだその前の産みの苦しみの時代です。今の被造物のうめきはこの苦しみからの解放を待望するうめきにほかなりません。

二番目にキリスト者のうめきについて考えてみたいと思います。もう一度お読みします

と、「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」という箇所であります。このように、キリスト者もうめいているのです。キリスト者がイエス様を救い主として信じた後も、このようにうめかなければならないとは、いったいどうしたわけなのでしょうか。

まず第一に考えられますのは、まだこの世に置かれている私たちキリスト者の霊は神様に従いたいと切望するのですが、不完全な体にはまだ自分中心の思いが残されていて、霊と肉との葛藤（かっとう）が起るためであるということです。それを大変よく言い表わしているのがローマ人への手紙の7章です。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見

いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ人への手紙7・18～24）

このようにパウロは述懐しております。すべてのことに秀で、神の律法を完全に守ろうとしたパウロでありました。彼は復活されたイエス様に出会うまでは、イエスは神ではないと思い込んで、イエス様が救い主であるという事実を宣べ伝えているキリスト者たちを皆殺しにしようとしたほどの人でありました。しかし、殺意に燃えてダマスコへキリスト者たちを捕えに行く途中で、目もくらむほどの天からの光に照らされ、復活されたイエス様の「なぜわたしを迫害するのか」というみ声を聞いた時から、彼は百八十度変えられ、心の目が開かれて、小アジアの国々へ、またヨーロッパへとイエス・キリストの福音をいのちをかけて宣べ伝え、新約聖書の中の多くの書簡を書いたほどの素晴らしいキリスト者となりました。イエス様ご自身が「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエル

の子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」とおっしゃったことが使徒の働きの9章に書いてある通りです。

そのパウロでさえ、「私はほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と言っているように、この世にある間はどんなキリスト者といえども不完全な心と体を持つ、赦された罪人であるにすぎません。けれども、イエス様を救い主として受け入れていない人々と決定的に異なっているのは、キリスト者は罪に問われない、罪が赦されているという事実なのであります。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

（ローマ人への手紙7・25、8・1）

パウロはこう言って、イエス・キリストを信じたゆえにもはや決して罪に問われることがないことを心から感謝しているのです。これがこの世に置かれているキリスト者の喜びの源であります。そして、イエス様がこの世に再び来てくださる時完全な者とされる、それも時間の問題だということを彼は知っているのです。

パウロだけではなくほかのイエス様の弟子たちもこの霊と肉との葛藤（かっとう）を経験しているこ

とが聖書の中に書かれております。不完全な人間ですから、イエス様を信じたからといってもすぐに聖人君子のようになり、まったく清らかになるのではなく、相変わらず生身の人間としての苦しみ、悩みがありますが、それは私たちだけではなく、パウロですらあるいはペテロですらそのような苦しみとの戦いをしていたということに、私たちは大変親しみを感じるいっぽう、そのことをイエス様が聖書の中で示してくださっていることをほんとうに感謝しなければならないと思います。

もう一つキリスト者がこの地上で肉体という重荷を負ってうめくことには大切な意味があります。ペテロの手紙第一の1章からそのことについて少しお読みしたいと思います。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。いまは、しばらくの

間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

（ペテロの手紙第一1・3〜7）

ここにキリスト者のうめきの大きな理由が書かれております。約束の通りイエス様がキリスト者を迎えに来てくださる時にイエス様に似たものとされるキリスト者は、その過程において意味のある試練を通されるのであります。神の子にふさわしくなるための、神の愛による訓練なのです。

けれどもピリピ人への手紙3章20節から21節にはこのように書かれております。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ人への手紙3・20〜21）

なんという素晴らしい約束でありましょうか。私たちはイエス様の栄光のからだと同じ

姿に変えられて、もうすでに国籍のある天に行くことが出来るのです。これがキリスト者の希望であります。間もなく栄光の姿に変えられた時に、うめきはほんとうの喜びに変わるのです。

第三の御霊のうめきについて少し学んで終わりたいと思います。ローマ人への手紙8章26節に「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」とあります。キリスト者には必ずイエス様の御霊が内に住んでくださっています。ヨハネの福音書14章16節で、「父なる神様は、助け主をあなたがたに与えます、その方は真理の御霊です。」とイエス様が十字架にかかられる前に約束してくださっています。御霊とはいろいろに表現できますが、私は一番分りやすいのは、目に見えないイエス様と考えることだと思っています。目に見えるイエス様は十字架にかかられ、復活されて天に昇られましたけれども、目に見えないイエス様がいつも私たちの中に住んでくださっております。そして、私たちを支え、励まし、とりなしていてくださいます。先ほども申しましたように、私たちキリスト者も地上で生きている間は、自分の思いを制御出来ないことがままあります。けれども御霊によって、目に見

えないイエス様に代わって働いていただく時に、自分のものではない、イエス様の力、御霊の働きを体験することが出来ます。

私はここで、御霊ご自身が私たちのために深いうめき声をあげてとりなしてくださっているということに、あらためて驚きを感じるのです。というのは、私自身、人が苦しんだり、悩んだり、悲しんでうめいている時に、その人と一緒にうめくなどということはとても出来ません。自分の娘が苦しんでいた時は、私もうめきましたけれど、その前も後もそんなことをしたことはありません。その位、私は情け無い人間です。ですから、私たちが苦しんでうめき声をあげる時に、全知全能の神様が手塩に掛けて造ってくださったにもかかわらずご自分から背き離れた私たちのためにうめいてくださっている。そのことを考えると私はここでほんとうに感動するのです。そのように愚かで、恩知らずで、何もわからない、そういう者を救ってくださって永遠のいのちを与えてくださったばかりか、なお私たちのためにうめき声をあげてまでもとりなしてくださる、こんな愛があるでしょうか。

これまでに、三つのうめきについて考えてまいりました。ご再臨の日はいつかわかりませんが、その日は必ず来ます。その日、神様のお造りになった全ての被造物、私たちを含めて被造物全体が栄光の自由の中に入れられ、歓呼の声をあげて喜ぶのです。ほんとうに

私はその日を待ち望みます。

けれども、私たちの待望するご再臨の日は、それまでにイエス様を受け入れない方々にとっては恐ろしい裁きの日となるのです。神様がご自身を犠牲にしてまでも私たちの背きの罪を赦そうと、一方的な愛をお示しになっておられるのを拒み続けた者まで神様はお救いにはなりません。しかし、ほんとうに従うべきは自分ではなく、自分を造り愛してくださっている神様であることを信じて、心砕かれ、へりくだって、ありのままの姿で神様の前に出る方を神様は必ずお救いくださいます。今日ここにいらっしゃる方々一人残らず救われてご再臨の時に共に心から喜ぶことが出来ますよう切にお祈りする次第であります。



のあざみ

主イエスの祈りに支えられる信仰

「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。

しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」

しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

（ルカの福音書22・31～34）

彼らは中庭の真中に火をたいて、みなすわり込んだので、ペテロも中にまじって腰をおろした。すると、女中が、火あかりの中にペテロのすわっているのを見つけ、

まじまじと見て言った。「この人も、イエスといっしょにいました。」ところが、ペテロはそれを打ち消して、「いいえ、私はあの人を知りません。」と言った。しばらくして、ほかの男が彼を見て、「あなたも、彼らの仲間だ。」と言った。しかしペテロは、「いや、違います。」と言った。

それから、一時間ほどたつと、また別の男が「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから。」と言い張った。しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません。」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。

主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。

（ルカの福音書22・55～62）

今、お読みいたしました箇所についてこれからしばらく考えてみたいと思います。最近私はこの箇所に大変心が捕われておりました。ここにおいでになる方々の中にはイエス様

に従って歩んでいらっしゃる方も多いと思います。また、まだイエス様を信じていらっしゃらない方もおられますが、どうぞこの箇所を通してイエス様が私たちに何をしてくださっているか、ということについてご一緒に考えていただきたいと思います。

イエス様を信じたらどうなるか、きっといいことがあるのではないか、とイエス様を外から見ている方々は思っていらっしゃるのではないでしょうか。そうは考えないにしても、困難や患難や苦しみなどというものは減るのではないかと思っている方が案外多いのではないかと思います。けれども、現実にイエス様を信じている者、キリスト者は、信じる前と比較して、我々を取巻く状況が客観的に見てそんなに大きく変わることはない、依然として物質的あるいは精神的な苦しみ、例えば倒産、失業、病気、愛する者の死、他人からの中傷、迫害などの患難の中に置かれているという場合が多いのではないでしょうか。「それでは、信じても少しもいいことはないじゃないか」と単純にお思いにならないでいただきたいのです。実は、そこがイエス様の素晴らしさですから、しばらく、聖書を通してそのことを考えてみたいのであります。

今お読みいたしましたルカの福音書22章の31節から34節が今日の主なテーマになるのですが、イエス様の弟子たち、ご存知のように12人を中心としてたくさんの弟子たちがおり

ました。イエス様が十字架にかかられる時が近づいて、エルサレムの町に入られるのですが、弟子たちにはそのことのほんとうの意味がわからないのです。弟子たちがイエス様に信頼していたことは確かであります。だからこそ、それまでイエス様に従って行ったのです。ところがそのイエス様が捕えられて十字架の上で殺される。そのうえその後に彼らに迫害が襲って来た。このようなことを彼らは考えてもいませんでした。

もちろん、イエス様はそのことを何度も予告しておられたのです。先ほどの箇所の少し前になりますが、ルカの福音書18章の31節から34節を読みますとそれがわかります。

さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子（イエス様）について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。

人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

（ルカの福音書18・31～34）

そして22章にまいりまして、イエス様は弟子たちとの最後の晩餐の後でペテロに声をかけられ、31節で、「シモン、シモン。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました」とおっしゃいます。けれども、シモン・ペテロには何のことだか、何が起こるのかさっぱりわからない。しかし、ただならない状態であることはうすうす感づきましたので、「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」と大変健気に答えたわけです。

しかしながら、34節でイエス様はペテロに向かって、「あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います」とおっしゃったのです。麦のようにふるう、というのは以前に米屋さんなどで米や麦などの穀物を箕という竹で編まれた篭のようなものに入れてふるいますと、軽い籾殻と脱穀された穀物が分離して、米や麦は残りますが籾殻は吹き飛ばされてゆく、という作業です。イエス様はサタンが弟子たちをそのような目に会わせることを願って聞き届けられた、とおっしゃっています。いったい誰に聞き届けられたのでしょうか。神様になのであります。

ここで不思議に思われるかも知れません。そんなことをサタンが願って神様に聞き届け

られた。なぜ神様は許されるのだろうかとお思いになることでしょう。実はサタンというのはかつては天使であったのですけれども堕落して神の恵みから離れ、我々を神から引き離すものとなった、これがサタンであります。けれどもサタンの働きは無制限に許されているのではなく、神によって制限されております。聖書に書いてありますように、サタンの末路は最後にキリストによって滅ぼされる、地獄に落ちて永遠の苦しみを味わうのですが、それまでの間、制限された範囲で我々を神から離すためにいろいろと誘惑を仕掛けて来るのであります。しかし、それも神様の許しがなければ出来ません。もう一つの例に、ヨブという人にサタンが攻撃を仕掛けたということが書いてある箇所があります。ヨブ記の1章6節から12節をお読みいたします。

ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。主はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて言った。「地を行き巡り、そこを歩き回って来ました。」

主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」サタンは主に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。

あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違いありません。」

主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこでサタンは主の前から出て行った。

（ヨブ記1・6～12）

ここで神はヨブのいのちを取ってはいけないという条件つきで、サタンにヨブの持ち物を全部取り去って彼を試みることを許されたのであります。ここでもとのところに戻りまして、ペテロを始め弟子たちについても神はサタンの願いを聞かれたのであります。

ルカの福音書22章の54節以降をみますと、イエス様は大祭司に捕えられて引いて行かれました。するとサタンはただちにペテロをふるいにかけました。ほんのしばらく前にイエス様に対して、「死を賭してもあなたに従います」と誓ったばかりのペテロが大祭司の家の中庭の火あかりの中で、つぎつぎに三人の人から「あなたもイエスと一緒にいた、あなたもイエスの仲間であろう」と指摘された時に、そのつど「私は彼を知らない、イエスを

知らない」とイエス様との関係を否定してしまったのであります。その時に鶏がないてペテロはイエス様に言われた言葉を思い出したのです。

そのすぐ後に、私が非常に心を打たれた箇所があります。それは61節で、「主が振り向いてペテロを見つめられた」というところです。なぜ、どういうわけで主はペテロを見つめられたのでしょうか。私は、イエス様はその時ペテロの信仰が無くならないように祈りながら、じっと見つめておられたのだと思います。彼はそのイエス様の視線を感じて激しく泣いたのであります。サタンのふるいというのはまことに強烈です。ペテロもこのサタンの猛烈な攻撃に会って信仰が激しく動揺します。けれどもそれで彼はイエス様から離れたか、信仰を捨てたか、そうではないのであります。彼はイエス様の祈りによって信仰が支えられたのです。それをペテロのその後の行動によって私たちは知ることが出来ます。

イエス様が復活され、父なる神のもとに帰られてからペテロは何をしたでしょうか。彼は非常な勇気をもってイエス様が復活されたことを証しし、多くの人たちにイエス様がどなたであるかということを雄々しく宣べ伝えたのでありました。このことは使徒の働きの2章14節以降にはっきりと記されております。

大祭司の家の中庭でイエス様を知らない、と言った彼がそのように立ち直ることが出来

たのはイエス様の祈りに支えられたからであります。もし、ペテロが自分の力や意志だけに頼ってイエス様に従って行こうとしたならば、あの時、彼の信仰はサタンのふるいにかけられて籾殻のように吹き飛んでしまったでありましょう。

もう一人、対照的な弟子がいました。イスカリオテのユダであります。この人も有名ですから皆様ご存知のことと思います。彼は大変利口であったようです。しかし利口であったが故に自信がありました。自分の判断に依り頼む人でありました。ではなぜ彼がイエス様の弟子としてイエス様に従っていたのでしょうか。それはイエス様を信じたというよりも、彼の知恵で、このイエスという方、かずかずの奇跡を行い、素晴らしい教えを多くの人々に与えたこのイエスという優れた人に自分が従っていれば、やがて必ず自分も利益を得ると考えたのであります。

この当時ユダヤはローマの支配下にありました。血気のある人たちは、なんとかローマの支配から脱して独立しようとひそかに地下で運動していたのですが、その時にこの優れたイエスという人を王にしてローマからユダヤの国を独立させる、イエスを王にすれば自分は高い位に就ける、これが彼の判断であり、イエス様に従って行った理由でありました。その彼の判断と希望は、イエス様が十字架にかけられることがはっきりした時に脆くも打

ち砕かれました。彼の期待が外れた時にサタンの攻撃によって、彼の心はイエス様から離れました。そして銀三十枚でイエス様をエルサレムの祭司長らに売り渡したのであります。

ルカの福音書22章の47節を見ますと、ゲッセマネの園でイエス様が祈り終えて弟子たちと話していた時のことが書かれております。

イエスがまだ話をしておられるとき、群衆がやって来た。十二弟子のひとりで、ユダという者が、先頭に立っていた。ユダはイエスに口づけしようとして、みもとに近づいた。だが、イエスは彼に、「ユダ。口づけで、人の子を裏切ろうとするのか。」と言われた。

（ルカの福音書22・47）

このようにして、ユダは口づけを合図にイエスを彼らに引き渡したのです。

いったいペテロとユダとの間にどのような差があるのでしょうか。ユダもペテロも人間である以上、サタンに対して自分の力とか知恵で勝つことは絶対に出来ないのであります。ユダが悪人でありペテロが善人であるというような区別は私たちには出来ません。すべての人が罪人であると聖書は言っておりますから、二人の間にそのような本質的な差はありません。ではこの二人の間にある根本的な差は何か。それはイエス様の愛の中にとどまっ

ているかどうか、その差だけであります。イエス様はユダも愛していらっしゃいました。弟子たちの中でユダを会計係にするほど信用しておられたということでもそれはわかると思います。しかし、ユダはイエス様を信じてはいなかったのです。彼は心を開いてイエス様が自分を愛してくださっていることを信じなかったのです。イエス様の愛の中にいることを彼は拒んだわけです。イエス様を信頼するのではなくて批判して、自分の判断で、自分の考えに依り頼んでイエス様の愛を離れたのであります。そのために彼はサタンにふるわれた時に、簡単にイエス様を捨てました。

イエス様の愛と私たちの関係、これはちょうど魚と水の関係と言ってもいいのではないでしょうか。イエス様の愛は私たちのいのちのために絶対に必要であると確信する時に、魚が水の中でのみ、いのちを与えられて生きているように、私たちはイエス様の愛の中でのみ、ほんとうに、そして永遠に生きることが出来るのであります。

私たちがサタンに激しくふるわれるとその時は動揺します。けれどもイエス様の愛のうちにいる限り、私たちはどんなに動揺しても、「わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました」と言ってくださっているイエス様ご自身のとりなしの祈りによって、イエス様のもとに立ち返ることが出来るのです。

神はそのひとり子（イエス様）を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（ヨハネの手紙第一４・９～10）

とありますように、私たちを造ってくださった神様を離れて自分勝手に生き、神様の存在すら認めようとしなかった私たちは、その罪のために当然滅びに定められるべき者でした。それを限りない神の愛によって赦してくださるために、御子イエス様は父なる神様の御心に従って、なだめの供え物として十字架の上で私たちの受けるべき罰を受けて身代わりに死んでくださったのです。完全な愛であると同時に、完全な義であられる神様が、私たち人間の背きの罪を赦してくださる方法はこれ以外になかったのであります。背いた私たちのために御子を十字架にかけてくださった父なる神様、また父なる神様の御心に柔順に従って私たちの罪のために十字架上で死んでくださったイエス様、この想像もつかないような神の愛を知った時、私たちはその愛からどうして離れることが出来るでしょうか。

イエス様を信じる者は脱穀された麦であります。すでにイエス様の十字架の死によって、

自分ではどうすることも出来なかった、自分の身にまといついている罪という籾殻を脱ぎ捨てることの出来たその麦であります。けれどもキリスト者はなおも籾殻と共にふるいにかけられるのであります。なぜでしょうか。それは籾殻を吹き飛ばして麦をもっともっと精練するために神様がサタンにそれを許しておられるからであります。人間というのはどんなに強がっていても弱いのです。イエス様はそれを先刻ご存知であります。しかし、私たちがイエス様の愛のうちにとどまっているならば、先ほどの信仰の動揺もそれ自体信仰の成長を促すものであると私は思います。なぜならば、その動揺によって自分の能力、あるいは信仰に対する自信、といったようなものが粉々に砕かれるからであります。自我が砕かれる度に、私たちはイエス様に依り頼む度合いがますます強くなり、イエス様の愛をより深く体験的に知ることになります。そして、そのようになれるのは、イエス様が私たちの信仰がなくならないようにと祈っていてくださるからにほかなりません。

ヘブル人への手紙12章10節から11節にこう書かれております。

霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、か

えって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル人への手紙12・10～11）

また、ペテロの手紙第一1章6節から7節には、

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

（ペテロの手紙第一1・6～7）

と書かれております。

天国への道そのものであり、真理そのものであり、いのちそのものであられるイエス様を信じる信仰は、この世の御利益信仰とはまったく違いますから、目に見えるようなこの世の恵みを与えられるというよりは、イエス・キリストに似る者とされるための訓練として試練が与えられることも多いと言ってよいと思います。けれども、私たちがこの世の旅路を終えた時には、すべての苦しみからまったく解き放たれて、死後のさばきに会うこと

なくただちにイエス様が待ってくださっている天国に行く特権が与えられています。そのうえ、その時までイエス様ご自身のとりなしの祈りによって守られている。こんな幸いなことはないと思います。

もう一人イエス様の弟子について考えて見たいと思います。それはパウロです。パウロと申しますと、ペテロと対照的に大変強い人とよく言われますが、彼は自分の弱さを十分に知った人でありました。コリント人への手紙第二12章の7節から10節にそのことが証明されているのではないでしょうか。

私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからです。

（コリント人への手紙第二12・7～10）

とパウロは告白しております。もしパウロが自分の力で信仰を固く保って行こうとしたならば、サタンの攻撃に会って倒れてしまったことでしょう。けれどもここにありますように、パウロは自分の弱さを誇る、砕かれた人でありました。それゆえ彼はイエス様の力によって強くされたのです。明日のことさえ分らないような自分自身を自分の主人としてしまうような愚かな私たちが、その弱く愚かな己を知ってイエス様の愛にすがる時、イエス様はシモン・ペテロのために祈られたように、私たち一人一人のためにも日々刻々祈ってくださっているのを知ることが出来ます。そのようなイエス様の祈りに支えられながら信仰の歩みを続けることの出来る我々は、苦難の中にあっても日々深い平安をもって過ごすことが出来ます。イエス・キリストが「わたしはあなたがたにわたしの平安を与えます」とヨハネの福音書14章27節で約束してくださった神の平安がこれであります。このような人の知恵では考えられない平安、苦難の中にあってもなお我々を満たす平安の中で生きることの出来るキリスト者はほんとうに幸せな者であります。

まだイエス様を信じていらっしゃらない方々に、この生きて働かれるまことの神と共に歩む幸せ、すべての罪から解き放たれ、永遠のいのちを持つ幸せを知っていただきたいと

切に願う次第であります。



しらねせんきゅう

愛する者との再会

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（テサロニケ人への手紙第一４・13～17）

今日は娘のまりがちょうど三年前にこの世を去った日に当ります。キリスト者の言葉で申しますと、肉体の衣を脱いでイエス様のもとに帰った日に当たります。その日以来、今日まで私たち夫婦はまりとの再会を待ち望みながら過ごしてまいりました。これからもその日を楽しみに生きてまいります。

そのように私たちはまりとの再会を待ち望んでおりますが、その希望は、会えるだろうとか、会えるかも知れないというような不確実なものではないのです。必ず再会出来るというのが私たちの確信なのです。

今日はそのようなわけで、愛する者との再会ということについてご一緒に考えてみたいと思います。私どもはまりをイエス様のもとに送りましたけれど、皆様の中にはご主人を先に送られた方、お父様お母様、あるいはお祖父様お祖母様を送られた方、またお子様を送られた方もいらっしゃいます。またご兄弟を先に送られた方もおいでになるでしょう。もしまだであっても、私が申しあげるまでもなく、生きている限り必ずそのような時がまいります。その時に、私たちがその愛する者と再会出来るかどうかは重大な問題であると

思います。そこで今日はこのテーマを選んでみました。

愛する者の死は人間にとって最大の悲しみであると思います。なぜでしょうか。それは何よりも、その愛する者が手の届かないところに行ってしまった、もう二度と会えない永遠の別れであるという思いのためです。また、今いったいどこでどうしているのだろう、一人ぼっちでさまよっているのではないだろうか、というような思いがその悲しみを増幅させます。こちらでどんなに助けたくても、もうどうすることも出来ないわけです。そのように考えますと、もう絶望的な悲しみであります。

そして悲しみのあげくに、イエス様を信じていない方でも、自分の愛する者はきっと天国にいるのだと自分に言い聞かせて自分を納得させようとすることが多いのではないかと思います。それによって、少しでも悲しみや不安をなくしたいというお気持ちはよくわかるのですけれども、「その愛する方が天国にいるという保証はありますか」と問うた場合にその保証は何もありません。

けれども、聖書はどう言っているでしょうか。冒頭にありますように、テサロニケ人への手紙第一14章13節から17節で、イエス様を信じたキリスト者がこの世を去った時、私たちは他の人たちのように悲しみに沈むことはない、そのためにぜひ知っていてもらいたい

ことがある、と言っています。何を知ってもらいたいのでしょうか。まず14節にキリストを信じて死んだ者たちはイエス様が再び来られる時に一緒に連れて来てくださると書いてあります。このことからも、その人たちが今イエス様と一緒にいることがわかります。

次にその時まだ地上に生き残っているキリスト者は、引き上げられて空中でイエス様と、またイエス様が連れて来てくださった愛する者たちと出会うことが出来る、と書いてあります。そしてその時、まずキリストにあって死んだ者が先に復活の体を与えられて霊肉共に完全な者となり、次に生き残っている者が復活の体を与えられ完全な者とされて空中で一緒になり、それからは永遠にイエス様とそして愛する者たちと、もう決して離れることなく何時までも共にいることになります。だから、悲しみに沈むことはない、と神様は言っておられるのです。

今日初めておいでになって、聖書をお開きになった方々はとんでもないことが書いてある、そんなことは常識では考えられないとお思いのことでしょう。後でまたよくご説明したいと思いますが、ここでまず、イエス様を信じて死んだ人のよみがえりについて聖書はどう言っているかということを、コリント人への手紙第一15章17節から22節で、見てみたいと思います。

もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中でいちばん哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

（コリント人への手紙第一15・17～22）

もし、イエス・キリストがよみがえられなかったのならば、イエス・キリストはただの人に過ぎないわけです。キリストがよみがえられたということは何を意味するかと言いますと、イエス・キリストは人でなかったということですね。よみがえられたということはイエス様が人の姿をもって世に来られた神であったということです。よみがえられなかったならば、イエス様は神ではなく人であって、単なる預言者か偉大な宗教家に過ぎないということになります。もし、イエス様が人であったなら、そのイエス様を信じた者の罪が

赦されるなどということはあり得ないことなのです。イエス様が神であったからこそ、十字架にかかって人間の罪を赦すことがお出来になったわけです。どんな偉い人であっても、生れながらにして罪を負っている人間の罪を取り除くことは出来ません。イエス様が神であったからこそ、私たち一人一人の罪を十字架の死によって取り除いてくださり、それを信じるだけで私たちの罪が赦されるのですが、もしイエス様が人であったならば、私たちがいくらイエス様を信じても依然として罪の中にいることになります。もしそうであったならば、イエス様を信じた者も罪が赦されないままで死んでしまったのですから、滅んでしまったわけである、ですから人であるキリストに希望を置いているのなら、キリスト者ほど哀れな者はないと言っています。

けれども、事実イエス・キリストは十字架の上で死にました。そして、その三日後に復活されたのです。イエス様の復活について聖書はそれが事実で、歴史上現実に起こったということを証明しています。そのことを二、三聖書から見てみたいと思います。まず先ほどのコリント人への手紙第一15章1節から8節をお読みいたします。

兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福

音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。

（コリント人への手紙第一15・1～8）

月足らずで生まれたと同様な私というのはパウロのことですが、イエス様は一人や二人の人に復活なさったご自分を証明されたのではなくて、ここに書いてありますように、五百人以上の人たちにご自分が復活なさった事実を示しておられるのです。もちろん、今の私たちはそれを見ていません。見ていませんけれども、証言を私たちが信じるか信じない

かです。一人や二人の証言であれば、その人が嘘つきであったり、頭がどうかしているかも知れないと思って信じられなくても仕方がありませんけれども、五百人以上の人が復活のイエス様を見たと証言しているのに、もしそれを信じないとしたら、信じないほうがどうかしているのではないでしょうか。これは裁判の証人と同じだと思います。

次にルカの福音書24章30節から48節までをお読みいたします。

彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。それで彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明してくださった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真中に立たれた。彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。すると、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。わたしの手

やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか。」と言われた。それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。

（ルカの福音書24・30～48）

このようにして、弟子たちは復活されたイエス様にさわって、またイエス様が魚を召し上がるのを見て復活されたイエス様が目の前にいらっしゃることを信じました。また、ヨ

ハネの福音書20章18節から20節までをお読みいたします。これはマグダラのマリヤがイエス様の葬られた墓の所に行ってみるとイエス様はいらっしゃらない。戸惑っていたところにイエス様がマリヤの前に現われた。それから後のことです。

マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました。」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。

（ルカの福音書20・18～20）

ここでもイエス様はご自分の手とわき腹、つまり十字架に釘づけられ、槍で刺されたあとを証拠としてお見せになって、弟子たちが幽霊を見ているのではなく、実際に復活されたイエス様ご自身であることを示されたのです。

このようにはっきりと聖書の中に書いてあるのですけれども、クリスチャンの中にも、イエス様の復活を疑う方がたくさんあるのです。ほんとうに残念なことだと思います。恐

らくそういう方は自分の知恵とか知識に依り頼んで、聖書を通して語られている神様からのメッセージを信頼し兼ねていらっしゃるのでしょう。けれども、そうなるとそのような方々にとってイエス様とは何なのかと思ってしまいます。イエス様が神の国を宣べ伝える伝道者としか考えられないのなら、そのようなクリスチャンをクリスチャンと呼べるのでしょうか。

けれども、心の砕かれた方には、イエス様がご自身を明らかにしてくださいます。私たちの集会に今年の夏八十歳でイエス様を信じられたご老人がおられます。その方は信じられる前はイエス様を釈迦や孔子やマホメッドと同じ宗教家であって、世界何大宗教かの一つであるキリスト教の始祖であると思っていらっしゃったそうです。ところが、このご老人はイエス様によって目が開かれ、イエス様がどなたかおわかりになったのです。その方は「イエス様は釈迦や孔子やマホメッドをお造りになった方だったのですね。今まで私は大変な思い違いをしていました」とおっしゃったのです。ほんとうにそうなのです。そのイエス様をほかの人間と同じレベルで考えますからイエス様がどなたかわからない、イエス様が私たちに何をしてくださったかわからないのです。自分をクリスチャンと思っていらっしゃる方の中にそういう方たちを見るのはほんとうに情無いことだと思います。

私たちが生まれながらにして持っているこの罪の宿った血と肉の体では天国に入ることは出来ないのです。けれども、イエス様を信じた時、私たちには人間がどんなに努力しても拭うことの出来なかった罪が赦され、永遠のいのちを与えられて、私たちは天国に入ることが出来る者とされます。それはなぜかと言いますと、私たちがよみがえりのイエス様、永遠に朽ちないイエス様を着ることによって、不死を着ることが出来るからです。復活によって死に勝利されたイエス様を信じることによって私たちも死に打ち勝つ者とされるからです。コリント人への手紙第一15章50節、53節、54節にそのことが書いてあります。

兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。

（コリント人への手紙第一15・50、53～54）

こう書かれております。ここでもう少しキリスト者の復活について考えてみたいと思います。聖書では死者の復活を、霊の復活と肉体の復活とにわけて述べています。私たち人

間はほんとうに罪が深いのですが、これは私たちに始まったことではなく、先ほども申しましたように、最初の人アダムが神様に背いて以来、人間は一人残らず神に対する背きの罪を持つ者となり、実際に背き続けて来たわけです。

神様が私たち人間をお造りになった時、ほかの生物には無い特別のものを与えてくださいました。それは霊なのです。動物にも心はあります。ですから、喜んだり悲しんだり怒ったりしますし、こうしようという意志も持っています。けれども、動物は霊を持っていません。霊とは何かと言いますと、神様と交わるためのもの、神様と話すことが出来る、そのために与えられているのが霊です。これが、神様が人間をご自分に似るものとしてお造りになったという一番大きな証拠です。ところが、私たちの霊は、アダムが神に背いて以来、死んだも同然になっています。しかし、イエス様を信じ受け入れますとその時直ちに霊は生きたものとなるのです。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」とおっしゃるイエス様、「わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら、救われます」とおっしゃるイエス様、そして、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです」とおっしゃるイエス様、

そのイエス様を信じた瞬間に肉体はそのままですけれども、霊はすでに死からいのちに移され、罪の支配から解放されて、新しく永遠に生きるものとなるのです。そして、そのようなキリスト者にやがて肉体の死が訪れた時、その人の霊は古い肉体の衣を脱いで、直ちに、天国のイエス様のもとに行くことが出来るのです。

コリント人への手紙第二5章1節でパウロはこう言っております。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神のくださる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。

（コリント人への手紙第二5・1）

パウロは自分の体を地上の幕屋や、テントに例えました。私たちの肉体はほんとうに破れやすい天幕のようなものです。私は医者ですから、肉体という天幕がいかに破れやすいかということを知っています。破れた天幕を持った方たちがたくさん病院にいらっしゃって、あちこちのほころびを繕って欲しいとおっしゃいます。けれども、どんなに繕っても最後はボロボロになって破れ去ります。そのようなはかない肉体を私たちは後生大事にしているわけですけれども、霊がイエス様によって新しくされている者は、いずれ来る肉体の死の時も、その肉体を脱ぎ捨てると同時に天国に行くことが出来ます。

「霊の復活はわかりましたけれども、肉体の復活はあるのですか」というのが次の問題です。また、あるとすればいつなのでしょうか。肉体の復活はあるのです。コリント人への手紙第一15章51節から52節をお読みいたします。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

（コリント人への手紙第一15・51～52）

と書いてあります。またほかのところから見てみますと、テサロニケ人への手紙第一4章16節と17節に、

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下ってこられます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（テサロニケ人への手紙第一4・16～17）

そして、もう一度コリント人への手紙第一15章20節から23節をお読みいたします。

しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。

（コリント人への手紙第一15・20～23）

この箇所を読みますと、イエス様は復活して天に帰られましたが、もう一度おいでになる、その時がキリスト者の肉体の復活が起こる時です。約二千年前にイエス様は私たちを罪から救い出してくださるためにこの地上に来てくださいました。そして、私たちの罪のために十字架にかかってくださいました。そして、私たちに永遠のいのちを与えてくださるために復活してくださいました。それから、父なる神様のもとにお帰りになりましたが、ここにありますように再び来られます。どうして再び来られるのでしょうか。その答えが

ヨハネの福音書14章2節から3節にあります。

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

（ヨハネの福音書14・2～3）

これがイエス様のキリスト者に対する約束なのです。またおいでになる目的はまさにこれなのです。イエス様を信じた者をご自分の所に、天国におらせるために迎えにおいでになるのです。その時に、もうすでにイエス様を信じてこの世を去り、霊がすでにイエス様の所に行って、安らかに憩っている人たちはイエス様と一緒に空中まで降りて来て、そこで復活の体をいただきます。復活の体とは私たちの体とどこがちがうのでしょうか。こういう疑問をどなたもお持ちになることと思います。聖書にはその体についてコリント人への手紙第一15章43節から49節の間に記されております。まず、43節には復活の体は「栄光ある体」、44節には「御霊に属する体」とあります。また47節、48節には「天から出たもの」とあります。天から出たものとはイエス様のことですから、イエス様に似るものであ

ることがわかります。それから49節には「天上のかたち」とも書かれております。このように、いろいろな表現がありますけれども、栄光ある体、御霊に属する体、天から出たもののような体、これはきっと素晴らしい体だと思います。

最初神様が人をご自分に似せてお造りになった時、神様はそれを見てよしとされたのです。そのような完全な体を私たちは復活の時に与えられるのです。今私たちは不完全な体を持っております。けれども復活の時にはそのような素晴らしい体が与えられるのです。ですから、幼くして死んだ子どもたち、素直な心でイエス様を受け入れて死んだ人たち、また年を取ってから死んだキリスト者、いろいろな病気や事故などで死んだキリスト者、どんなキリスト者もイエス様が再びおいでになる時、素晴らしい完全な体を与えられて復活することが出来ると、ここで約束されているのです。

ご再臨の時は何時かわかりません。今日かも知れませんし、明日かも知れません。一年後かも知れませんけれども、イエス様を信じて死んだ者はイエス様がいらっしゃる日にこのような素晴らしい体で霊肉共に完全なものとなってよみがえると聖書ははっきりと言っております。

ではその時まだ地上に生きているキリスト者はどうかと申しますと、先ほどのように死

を経ずにそのままたちどころに朽ちない栄光の体に変えられるのです。そして、順番に従ってまず初めに完全な体によみがえっているイエス様を信じて天に召された愛する者と、その者たちを連れて迎えに来てくださったイエス様に空中で待ちに待った出会いをすることが出来るのです。そして、それからは、イエス様とまた愛する者と共にいつまでも永遠に別れることなく素晴らしい時を過ごすことが出来ると神様は聖書の中で約束してくださっているのです。

何という奇抜なことが書いてあるのかとお思いの方もあるでしょう。実際にそういう方がありました。以前の軽井沢の吉祥寺集会修養会に、いやいやおいでになった方がいらっしゃいました。その時ちょうどご再臨についてのメッセージがあったのですね。その方はイエス様が十字架につかれたり、復活されたり、またその上にもう一度天から迎えにいらっしゃるということをお聞きになって、あきれ返ってしまわれたのですね。そんなことを真面目になって聞いていられるか、と皆が引き留めるのを振りきって、車に飛び乗って東京に帰ろうと碓氷峠のほうに車を走らせたところが、妨げられてしまいました。ものすごく濃い霧で帰れないのです。キャンプ場に帰るのも悔しいと、あちこちのホテルやペンションに泊まろうとされましたが、どこにも空き部屋がなく、仕方なしに修養会のキャン

プ場に戻って来られ、その次の日にその方はイエス様を信じられました。この方を救おうと神様が決められたらどんなことをしても救われるのですね。

このように、イエス様のご再臨ということは常識ではとても信じ難いことです。けれども信じようと信じまいと、イエス様が私たちの罪のために十字架にかかられたことは事実ですし、復活なさったことも歴史的に裏づけられた事実です。ですから、神であるイエス様がまた来るとおっしゃったことも神様の約束であるがゆえに信じないわけにはゆきません。信じようと信じまいとそれは事実起ります。神様の約束は必ず実行されます。

なぜ私たちがご再臨を信じることが出来るかと言いますと、神様の人間を救うご計画、そして新しい神の国を造るご計画はイエス様のご再臨なくしては成就しないからであります。イエス様の誕生、十字架上の死、復活これは神様が実行してくださった人間に対する救いのご計画の成就でありましたが、この一連の神様のご計画で次に来るべきものはご再臨なのです。神様のご計画が中途半端で終わるはずがありません。必ず完了されます。ですから、私たちはご再臨は必ずあると信じることが出来るのです。

天国とはどういうところか私たちはまだ見たことがありません。けれども、きっと想像に絶する素晴らしいところに違いありません。ヨハネの黙示録の21章、22章にその素晴ら

しさの一部をかいま見ることの出来る記載がありますけれども、何よりも素晴らしいことは、そこには父なる神様と子なる神様のイエス様がおいでになるということです。私たちがそこに行けば神様に直接お会いすることが出来るのです。けれども、私たちは完全に正しくなければ神様の前に出ることは出来ません。神様に正しい者と見ていただけるたった一つの方法はすでに申しあげましたように、イエス様の十字架が自分の罪のためであったことを信じ、イエス様を救い主として受け入れることだけです。イエス様を信じる信仰によって、イエス様は罪に汚れた私たちをご自身の真白い義の衣で覆ってくださいますから、私たちはありのままの姿であっても、神様の前に正しい者として出ることが出来るのです。その時に私たちは全知全能であり、天地宇宙をお造りになった神様とは、イエス様とはどんなお方か、お会いして自分の目で見ることが出来るのです。これはほんとうに素晴らしいことであると思います。そして、愛する者と共に、またまだお会いしたことのない主にある兄弟姉妹と共に永遠に神様の側で終わることのない素晴らしい時を過ごすことが出来る、これが天国のほんとうの素晴らしさではないでしょうか。マタイの福音書8章11節に、イエス様がこうおっしゃっています。

あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からもきて、天の御国で、

アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。
（マタイの福音書8・11）

素晴らしいことだと思います。ですから、キリスト者の再会というのは、単に死後に再び会うということではありません。再会するにしても地獄で再会するというようなことになったらそれはほんとうに恐ろしく悲しいことではないでしょうか。そうなったら、喜ぶどころか、嘆きと苦しみと悔いしかない、そういう再会になってしまいます。イエス様を拒んだままで死んでしまいますと、イエス様の裁きによって永遠に火の池で苦しまなければならない、とヨハネの黙示録に記されております。

イエス様を信じた人と拒んだ人ではこのような天と地ほどの差があるのです。神様は絶対的な愛の方であると同時に絶対的な義の方でありますから、ご自分がいのちをかけて提供してくださった救いという絶対の愛を拒む者を赦すことはお出来にならないのです。クリスチャンの中に、家族や身近な人たちに全然神様からの福音を伝えようとしない方たちがあります。そういう方は、家族が滅んでしまってもいいと思っておられるのか、と不思議に思いますが、恐らく、そのような方はイエス様によって救われるということがどのような素晴らしい恵みであり幸いであるか、また救われないということがどのように恐ろし

いことであるかがよくわかっていらっしゃらないのではないかと思います。たとえご自分が救われていても、家族が救われていなければ天国での再会はあり得ないのです。ピリピ人への手紙3章18節、19節に、

というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

（ピリピ人への手紙3・18～19）

ほんとうに多くの人たちが、自分の欲望を神として歩んでいます。そしてイエス様のさし延べてくださる救いのみ手を無視し、すぐに終わってしまう地上の幸福をしっかり握りしめていたり、また、実際にキリストの十字架に敵対して歩んだりしています。そのような人々の最後はここに書いてありますように、滅びなのです。ですから、イエス様によって救われた私たちは、まだ救われていない人々の救いを心から祈って行かなければならないと思います。この世の幸せを共にするよりも、一人でも多くの方と天の国籍を共にするようになるために、祈って導くことが一番大切なことであると信じます。ピリピ人への手

紙3章20節、21節にありますように、

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ人への手紙3・20～21）

イエス様を信じた方々の国籍はもうすでに天にあるのです。ですから、私たちキリスト者は自分の国に帰るのが一番嬉しいことです。イエス様が迎えに来てくださった時に、私たちは喜び勇んで天の故郷に帰ることが出来ます。しかも、霊だけではなくて、素晴らしい完全な体を与えられて天に帰ることが出来るのです。その前に救われた私たちキリスト者に神様が望んでおられることは、私たちが一人でも多くの方にイエス様の救いを宣べ伝えて共に神様、イエス様のいらっしゃる天に国籍を持つ者となっていただくことであると信じます。


ふしぐろせんのう

著者略歴

重田　定義

1927年東京で生れる

1950年慶応義塾大学医学専門部卒業

現在東海大学医学部教授（衛生学）

東海大学医学部「医の倫理委員会」委員長

私達の国籍は天にあります

定価618円
（本体600円）

1987年 1 月31日　初版発行
1994年10月20日　第 6 刷発行

著　者　重　田　定　義

発行者　重　田　定　義

〒167 東京都杉並区清水 2-8-12

印刷・製本　新　生　運　動

配給・伝販



定価 618円
（本体600円）